

URZ      インフィニット・  
             ストラトス

NS—105

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

M78星雲・光の国で、闇と不老不死の力を手に入れてしまい、迫害され、一人の親友と共に星を裏切り、色んな世界を旅した男達がいた。彼らは様々なことを学び、一人は家庭を持ち、ある程度平和に暮らしていた。そんなある日、彼らのもとに一つの厄介ごとが舞い込む。彼らの新しい戦いが始まる。

いんすた↓<https://www.instagram.com/urz2005>  
105／

# 目次

出会い	
プロローグ：始まり	1
キャラ紹介	6
01：邂逅	11
02：白騎士の真相と亡国	18
03：事件	26
04：解決	36
05：日常とフラグ	52
06：勧誘	64
1学期	
07：入学	78
08：龍牙	95

09：不束者



# 出会い

## プロローグ：始まり

〈幻想郷〉

「何なの？こいつら？」

「さあ…」

「少なくとも、この世界のものではないな。」

幻想郷の妖怪の山、その近くの草原に、赤い袖なしの巫女服に、白の別途袖、赤いリボンで肩まで伸びた髪の後ろを結んだ少女博麗霊夢はくれいれいむと白髪びやくやに黒髪くろかみに白いラフジャケットの少年（以下殺那せつな）と、彼らのまえには黒いパワードスーツのようなものの残骸が数体転がっていた。

白夜「とりあえず戻ってかいせk」

「パー！ママー！」：ドガッ

白夜「おお、霊華！どうs：ゴハッ」

白夜が帰宅を提案したとき、霊夢と同じ服を着た女の子（以下霊華れいか）が彼に飛びついてきた。

霊華「あ！パパごめんなさい！アセアセ」

白夜「あ、ああ：：大丈夫。」

霊夢「それで霊華ちゃん、どうしたの？」

霊華「あ、はい！ママ、このワードスーツのある程度の解析が完了しました。」

殺那「マジか!?!それでこいつはなんなんだ？」

霊華「これは、Infinite・Stratos、通称〈IS〉と呼ばれるものです。」

霊夢「あいえす？」

???'「無限の成層圏という意味だよ。」

白夜「フィリップ！」

突然声をしたところ、そこには、濃緑の髪に全体的にラフな格好をした少年（以下フィリップ）がいた。

フィリップ「霊華ちゃん、あとは僕が説明するよ。」

霊華「はい、わかりました。」

フィリップ「ISというのは、篠ノ之束という人物がもともと宇宙開発での作業用ワードスーツだったものだ。」

白夜「だった：：：ということは今では違うもの、あの武装からしておそらくは兵器か

そこらとして使っているのだろうか」

フィリップ「正解。まあ今は兵器というよりスポーツとしてのあつかいに落ち着いているがね。」

霊夢「だけど、なんでそんなものが幻想郷に、しかも無人でいきなり襲ってきたの？」  
白夜「おそらくだが、何かしらの原因でこいつらがいた世界にワームホールか何かの次元の穴が開いてそこに落ちた。と、いうのが妥当か。無人なのはそもそもこいつらが無人機、襲い掛かってきたのは次元を越えるときに制御から外れた、もしくはもともと自動制御で次元を越えるときそいつがぶっ壊れたかのどちらかだな。」

殺那「次元超えるとき機械ぶっ壊れすぎじゃね？」

白夜「そんなもんだろ、電磁波やばいし、対策しないとうちの装備もただじゃすまないし。」

霊夢「話を戻すけど、問題はなんで次元の穴ができたのか、よね。」

白夜「そうだな・・・ いったい調べに行くか。」

フィリップ「相変わらず唐突だね」

殺那「それがお前らしいけどな。」

霊夢「私と霊華ちゃんは神社の仕事があるから少し遅れて行くわ。」

霊華「早く終えて絶対合流します！」

白夜「ああ、待ってる。だけどむりするなよ。」

霊夢・霊華「わかってる（ます）！」

白夜「んじゃ、行ってくる。」

霊夢「ちよっと待って」

白夜「ん？」

出発しようとした白夜を霊夢は呼び止め、

霊夢「（チュツ…）」

白夜の頬にキスをした

白夜「…！」

霊夢「いってらっしゃい！」

白夜「／／／いってきます／／／」

このやり取りをみて、殺那とフリリップは「相変わらずだ…。」と苦笑し、霊華は「ラブです！」とはしゃいでいた。

そんなあこんあで霊夢と霊華を除いた3人は一足先にスキマを開いて世界を越えた



く一方その頃、とあるラボく

「あの無人機どこにいったんだろく東さんの特製だから暴れたら大変だよく」

「東様、少し休んではどうでしょう？」

とあるラボで機械みたいなウサミミを付けた不思議の国のアリスのような恰好をした一人の女性篠ノ之束しののたはねが頭を抱えていた。その傍らには、目を閉じた少女、クロエ・クロニクルが心配そうに様子を見ていた。

束「うん、そうするよ。本当にどこ行っちゃったんだろう…」

彼女は、数日前に突然ラボから消えた無人機の行方を捜していたのだった。

## キャラ紹介

博麗<sup>はくれいびやく</sup>白夜<sup>びやく</sup>（旧姓：闇代<sup>くらしろびやく</sup>白夜<sup>びやく</sup>）

今作の主人公の一人、あらすじにあつた闇と不老不死の力を手に入れたあいつ。元宇宙警備隊員。

ヒカリの生命固形化技術に貢献するなど、光の国の技術革新に大きく貢献したが、一部過激派に妹を殺され、精神的に壊れ、街を半壊させ親友と共に星を裏切り、様々な世界を旅した。

その後、霊夢と出会い、恋人期間を経て結婚した。精神崩壊したときに、感情の大半を失ったが、今はほぼ崩壊前と同じまでに回復している。

容姿は、白髪で色白、中世的な見た目でつり目でもタレ目でもなく、左眼の瞳は白く右眼は黒。黒い服を好んで着る。髪型のイメージはまふまふ（この人の歌まじ最高）。性格はフレンドリーだが、少しコミュ障で、淡々とした口調になりがちになるせいでクールな印象を受ける。ただ、別に彼はクールでもないし、本人も自信がクールとは思っていない。蜘蛛とゴキブリが嫌いで、見つけたら発狂する。

URZ（ウルズ）：白夜の変身態。見た目はノアの面影があるが、感じはウルトラマン

より仮面ライダーに近い。左腕に黒ベルトに陰陽印の付いたブレスレット、「陰陽ブレス」、腰にハート形のバックル「URZバックル」、腰の左側にライライダーキック時のアギトのような形状の角で白黒の見た目のバトルナイザー「バトルゼクター」が付いているベルトの色はライトブルー、胸にはバックルと同じ形のカラータイマーが付いている。背部に翼を展開することができる、ただしほぼ使わない。

### 装備

URZバックル：見た目はエビオリガミの尾のパーツを白黒にして、中央にバックルと同形状の碧いクリスタルが付いて、真ん中に展開用の筋が入っている。展開した状態でメダルや特定のアイテムを入れて閉じることによって変身や技を発動させることができる。

陰陽ブレス：黒ベルトに陰陽印の着いたデザインのブレスレット。人間態の時は似たような見た目の腕時計になっている。元々はURZの力の暴走を防ぐための制御装置だったが、自力で制御可能なので正直いらなかったが、白夜が調子に乗ってごっこで改造したせいで、かなり狂った性能になっている。異空間収納（ストレージ）やURZバックルの変身待機移行など、マジで多機能。

バトルゼクター：元の名称は「バトルナイザー零」だったが、カブトの世界に行ったときに、クロックアップシステムを入れた時に白夜がふざけてゼクター化させたことで名称をバトルゼクターにした。機能は、クロックアップや怪獣召喚のほかにモンスアー

マーやメモリのマキシマムドライブ発動など、これもふざけてるほど多機能。

ウルティノイド・バラージ：白夜の専用機。見た目はノアをULTRAMAN―SUITにしたもので、ボディにザギのような赤いラインが走っていて、右眼が赤くなっている。基本的にノアとザギの技は使える。

#### 闇代殺那くらしろせつな

主人公二人目、元々は白夜が闇の力を手に入れた時に発現した別人格だった。別に裏の人格だからといって、破壊衝動や野心があるわけでもなく、性格はフレンドリー。以前に白夜と好きな食べ物が違うという理由で白夜の体に乗っ取り、自分の体を魔法で作ったため、今はその体を使って生活している。

容姿は、白夜と同じ色白だが髪は黒で若干白夜よりつり目。右眼の白目が黒く、瞳が紫の強めなオーロラ色、左眼は普通の白目に、瞳はアイオライトのような青とマゼンタのアースカラー。白い服を好んで着る。

URZ―D（ウルズ・ダークネス）：殺那の変身態。見た目はURZを全体的に黒くしたものだ。URZバックルは腰ではなく左腕の白い陰陽プレスに装着されたままになっており腰にはURZバックルと同形状で銀のブランクなバックルが着いている。腰の左側にはバトルゼクターが着いている。カラータイマーの色は紫。

## 装備

陰陽ブレス（白）：ベルトが白いだけで機能は白夜のものと同じ

イーヴィル・グリッター：殺那の専用機。見た目はティガをULTRAMAN―SU  
ITにしたものでボディにイーヴィルティガのような黒いラインがあり、左眼が水色。  
ティガとイーヴィルティガの技は基本使える。

## フィリップ・ワーム

主人公三人目、白夜と共に旅に出た親友。たまたま見つけたワームに憑りつくかたち  
で一体化し、しばらくは白夜に擬態してたがダブルの世界でフィリップに擬態した。性  
格は概ねオリジナルのフィリップと同じだが、オリジナルよりはコミュニケーションがある。容姿  
は風都探偵のフィリップの髪や瞳を濃緑にした感じ、ラフな服を好んで着る。

BIO（バイオ）：フィリップの変身態。ザ・ネクストの面影があるが、感じはウルト  
ラマンというより仮面ライダーに近い。腰にはURZバックルが装着されているが、そ  
の周りに白と黒の二匹の機械的な龍が巻き付いている。腰の左側にバトルゼクターが  
付いている。カラータイマーは、ひし形で濃緑。

## 装備

フアングガブリユウ：フィリップが変身に使う二匹の白黒の龍。黒がシュー、白が

ホーという名称になっている。変身したときは、URZバツクルの周りに巻き付いている。

シャイニング・ロプス：フリップの専用機。見た目はシャイニングゼロをULTRAMAN—SUITにしたもので、グレーの部分が黒くなっている。目はVer. 7.0（セブン）のようなバイザー両目の部分が水色に光っている。

博麗<sup>はくれいれいか</sup>霊華

霊夢と白夜の娘。と、行っても霊夢が身籠った訳ではなく、霊夢と白夜（URZ）のDNAを使って、敵組織が肉体を造り、ボトムアップAIにトップダウンAIと同じYES・NOの質疑応答プログラムを積ませたハイブリット人工知能（組織談）を脳に入れた、クローンとサイボーグを合わせたような存在。今は霊夢と白夜の娘として、仲良く暮らしている。白夜のDNAが入っているので、基本寿命以外では死なない半不死身。容姿は、霊夢を小さくして髪と左眼を白くした感じ。

## 01：邂逅

「I Sの世界」

街から離れた森、そこに一つのスキマが開き

白夜、殺那、フィリップ 「「ふ！」」

そこから三人の少年が、出てきて…

ドサッ！

白夜、殺那、フィリップ 「「グハッ！」」

いや落ちた。

殺那 「いつつくなんで地上10m以上離れてスキマが開いてんだ…」

白夜 「すまんが知らん」

フィリップ 「はは…」

殺那 「んじや、まずはどうする？」

白夜 「とりあえず、装備飛ばすか」

フィリップ 「そうだね、さつき磁気嵐でほとんど壊れたからね」

白夜達の装備は自己修復機能を備えているが、エネルギー消費が半端ではないのでエ

ネルギーの塊である太陽まで飛ばす必要があり、そのためだけのサブエンジンが備えてある。

フィリップ「修復が完了するまで数年はかかるね」

殺那「まじかくまあ気長に待つか」

フィリップ「そうだね、一先ず装備はこれでいいとして、次は東の搜索だね」

殺那「そうだなくいったいどこにいるのか…」

白夜「上空10000m辺りをホバリングしてるぞ」

殺那「は、まじ?」

白夜「ほら、このへん」

フィリップ「ああ、ほんとだ」

彼らの五感は普通の人間を超えており、例えば視力は地球からイトカワまでは目を凝らさずとも視認出来るほどである。そして、彼らの視線の先には巨大な兎の形をしたナニカがふよふよと浮いていた

白夜「とりあえず行くか」

殺那、フィリップ「りよ」

く東のラボく

配線が張り巡らされた一室に、銀髪に目の閉じた少女が何か作業をしているアリスと



白兔が渋滞した女性を呼び止めた。

クロエ「東様」

東「なに？くーちゃん」

クロエ「東様に会いたいという人達が来ているのですが」

東「はあ…どうやって嗅ぎつけてきたのか…適当に追いついて殺してもいいよー」

クロエ「それが…」

東「ん？」

クロエ「それが…訪ねて来たのは三人組の男なのですが…なんの装備もなく空を飛んで、しかも普通にインターホンを使って訪ねて来たんです」

東「は!？」

東 side e

くーちゃんの言ったことはとてもじゃないけど信じられなかった。だって東さんの光学迷彩を突破したまではないとして、それが男、しかも3人でなんの装備も装備もなく飛行して来るなんて多分他の人が東さんの立場でも信じないだろう。インターホンの方は正直シールドだと感じたけど…。とりあえず面白そうだから呼んじゃおう。

東「とりあえずお迎えしていいよ、どうやって飛んだのかも気になるし」

クロエ「かしこまりました」

そして、しばらくしてくーちゃんに呼ばれたのでリビングに行ってみるとそこには面白い見た目の男達がいた。1人は白髪に白黒のオッドアイ、アルビノかな？でも一応右眼は黒か、二人目は：右の白目が黒：病気なのかな？でも瞳の色は綺麗だな、この人もオッドアイだ、三人目はあ、この人は普通だ濃緑の髪に同じ色の瞳：だけどなんだろう？この人の雰囲気、人間じゃないみたいな感じがする。この人だけじゃない、全員同じ雰囲気が出てる。本当に何者なの？この人たち：まあいいか話だけでも聞いてみよう。

束「初めまして！みんなのアイドル束さんだよ！ブイブイ♪」

白夜、殺那、フィリップ「二(。 ㇿ )ポカーン：」

束「もーみんなノリ悪いなー」

白夜「いや：このノリにどうついて行けと：？」

束「ブーブー！あ、そういやお前ら一体何者？」

白夜「そっからか：まあいいや、俺は博麗白夜、気軽に白夜と呼んでくれで、こいつ等が、」

殺那「闇代殺那だ、俺も気軽に殺那と呼んでくれ、よろしく」

フィリップ「フィリップ・ワームだ、僕もフィリップで構わない、よろしく」

束「うんよろしく、じゃなくて君たち人間じゃないでしょ」



で?」思っていたら、男の方から話しかけてきた。

白夜「どうやら心当たりがあるみたいだな」

東「あるけど…なんでこれをお前らが持つてるの?」

白夜「これは幻想郷で暴れまわってたのをぶっ壊して回収したものだ」

東「げんそうきょう?」

白夜「そのことを説明するには少し長くなるけど良いか?」

東「うん」

白夜「んじゃまずは…」

この男の話はにわかには信じ難かった。彼らがこの世界とは別の世界からきたこと、その世界の裏側に幻想郷があり彼らはそこで暮らしていること、そして2つの世界のほかに無数の世界が存在すること、私が「それってパラレルワールドってこと?」と聞いたら彼は「いや、パラレルワールドは可能性の世界、一つの世界から無数に分岐したものだから大元は同じ世界だが、俺らが来たのはそもそもその始まりが違う異世界だ」と教えくれた。

白夜「まあ、ザっとこんなところだ」

東「なんか…」

クロエ「壮大ですね…」

私とくーちゃんはそんな言葉しか出なかつた。

## 02：白騎士の真相と亡国

N O s i d e

殺那「それで、このI Sがなんで次元を超えたのか心当たりとかない？」

東「うーん残念ながら、突然消えちゃったものだから正直全く手掛かりがないのだよ」

白夜「そっかー…：そういやーっ良いか？」

東「どうしたの？びやつくくん」

出会いから数時間、東は白夜達信用し、興味を持ったのか白夜を「びやつくくん」殺那を「せつくくん」フィリップを「ふいーくん」と呼ぶようになっていた。ちなみに、この呼び方について白夜達は気にしたら負けと思いついた無反応である。

白夜「白騎士事件についてなんだが、なんであんたはこんな事をしたのかと思ってるな」

東「へーくなどで白騎士事件を起こしたのが東さんってわかったのかな？」

フィリップ「白騎士事件に関しては既に検索済みだ」

東「検索？」

白夜「フィリップ、というより俺ら全員が使える能力で簡単に言えば世界そのものの記憶、俗にいうアカシックレコードにアクセスすることの出来る能力だ、ただ俺と殺那

だと体に合う合わないとかで数時間しか持たないけどフィリップは時間無制限で使えるんだ」

東「へーじゃあなんで今更東さんに聞くのかな？」

フィリップ「ただ、この能力には一つ欠陥があつてね、この世界ではこの世界の記憶しか記されないんだ、簡単に例えればもし仮に僕がこの場でコーヒーを飲んだとしても記憶には文字化けしてなんて書いてあるかわからないんだ、そして白騎士事件にも同じ文字化けの部分があつたから直接聞いてみたという訳だ」

東「なるほどー、それなら教えてあげよう白騎士事件の真相とやらを」

く6年前、篠ノ之神社く

東「うーくんどうしたらISを世界に認めてもらえるかな、いつそのこと軍事基地ハッキングしてミサイル発射させてそれをISで撃ち落とすとかしちゃう？」

そういうと彼女は各国の軍事基地にハッキングを仕掛けたが：

東「やっぱやめよう、ISは兵器じゃない、宇宙への翼なのだから！」

???'「どうしたんだ？いきなり大声出して」

そこに長い黒髪でつり目の少女、織斑千冬おりむらちふゆが突然話し掛けてきた。

東「やくーちゃん、どうしたの？」

千冬「なに、師範の稽古が終わったのでな、しばらくぶりにお前の顔を見ただけだ」  
現在千冬は東の家であり、神社兼剣術道場である篠ノ之神社で剣術の稽古を受けている。

東「そういうことか、いや、ね、どうしたらみんなISの価値をわかってくれるのかな？」

千冬「まあ、地道にやってくしかあるm「えー!?!」どうした!?!東!」

東「何者かが世界各国の軍事基地、しかも核保有国の核弾頭ミサイルにハッキングをしてるよ!」

千冬「何!?!それは本当か?というよりなんでお前がそれを知ってるんだ?」

東「いや、さっきまで各国の軍事基地にハッキングを…(▽、\*ゞ)エヘヘ」

千冬「は、く、なん、で、ハ、ッ、キ、ン、グ、し、て、た、の、か、は、聞、か、な、い、で、お、く、が、核、弾、頭、は、大、丈、夫、な、の、か、?」

東「この状況で冷静でいられるちーちゃんに東さんは驚いてるよ…」

千冬「驚きすぎて逆に冷静になったただで、大丈夫なのか?」

東「いや…それが…」

千冬「どうした?」

東「核弾頭は東さんがすぐ気付いたから各国の軍が気付く前に止められたけど…」



千冬「けど？」

東「無理矢理に止めてしかも核弾頭を止めることだけに専念したから…核弾頭の代わりに通常ミサイル2400発以上がいま日本に向かつてるんだ…」

千冬「何だ?!」

東「本当にごめん、でも今の時間だとこれが限界だったんだよ」

千冬「それはいいが、そのミサイルを止められるのか？」

東「あるにはあるよ…」

千冬「なにがあるんだ？」

東「お願いちーちゃん！ISに乗ってミサイルを止めて！」

千冬「だが、そんなことをしたら…」

東「多分、ISは兵器として見られるだろうね…でも、ミサイルを止めるにはこれしかないの！だからお願い！」

数分間の沈黙（実際は数秒）…

千冬「…わかった、あのミサイルは私が止める！」

東「ちーちゃん…ヒック…ありがとう…グスンッ」

ISの準備をしているとき、東はずっと泣いていた。

東「後は多分検索の通りだと思っよ」

白夜「なるほどなくでもなんで白騎士事件の記憶に文字化けが起きてたんだ？」

殺那「別次元からの干渉を受けたのは間違いないが…何か心当たりとかないか？」

東「うん…心当たりねえ、そういえばあの時…東さんが核弾頭の対処してるときに何かオレンジのノイズとキューキュー、キュルキュル？みたいななんか鳴き声みたいな音がなつてたような…」

殺那「それってまさか?!」

フイリップ「うん、多分だけど間違いないそうだね」

東「えーびやくくん達何かわかったの?!」

白夜「ああ、あの時東が見たのは恐らくバグスターウイルスだ」

東「バグスターウイルス…つてもしかして仮面ライダーエグゼイドのあのバグスターウイルス?!」

白夜「その通りってエグゼイドを知ってるのか？」

東「うん！もちろん！2016年の仮面ライダーでゲームと医者の一見合わなそうなのをモチーフにして」

クロエ「東様、落ち着いてください！脱線しています！」

東「ああ、ごめんごめん。つい興奮しちゃった。」

白夜「いや、気にするな。ところで、こちらのお嬢さんは？」

クロエ「申し遅れました。クロエ・クロニクルと申します。東様とは義理の親子です。」

白夜、殺那、フィリップ「二あ、ども」

白夜「話を戻そう：バグスターウイルスは、まあ知っている通り人間に感染するコンピュータウイルスなんだが、そもそもなんでわざわざコンピュータに感染したのかなんだよね」

東「え？どゆこと？」

フィリップ「バグスターは意思を持ったウイルスだ、人間を大量に殲滅するのが目的なら人間に感染した方が効率的だ。この世界には仮面ライダーはいないわけだからね。」



殺那「それに、あいつ等は人間を殺すのではなく、完全体になるのがそもそもの目的だ。完全体になるための憑代が消えるのはただ自分の目的から遠ざかるだけだ。」

東「なるほど。それはなぞでしかないね」

白夜「そゆこと。まあ調べていけば何かわかるかもな、そうすれば無人機のことも何かつかめるかもしれないから。」

東「そっか、東さんも出来る限り協力するよ！」

白夜「そりやありがたい。これから頼らせてもらおうよ」

東「まかせなsへく♪あ、この着信は…ちよつとごめんねくもすもす終日くみんなのアイドル東s…え!? スコーリユンそれほんど? 待つて! こつちでもなんとかできないかやつてみる! 

かかつてきたスマホに出た東は血相を変えたように大声を出した。

クロエ「どうしました? 東様。」

東「スコーリユンが、スコーリユンが大変なの!」

白夜「スコーリユン?」

クロエ「スコール・ミューゼル、亡国機業所<sup>フアントムタスク</sup>属の東様の友人です。」

殺那「ふぁんとむたすく?」

フィリップ「第二次世界大戦時から存在するといわれてる秘密結社だね。今ではISを使ったテロなどをやっている組織だ。」

東「とは言つても、スコーリユンは穏健派で、テロをやめさせようとしてるんだけど。」

白夜「そいつがどうかしたのか?」

東「なんかアジトに変な奴が来て組織の人間のほとんどを洗脳したみたいなの」

殺那「うわくすつげー飛躍した事態だな」

フィリップ「ほとんどつてことは数人は洗脳を免れているんだね」

東「うん、なんでもスコリーユンの部隊の人間だけは大丈夫みたい。」

白夜「そりやまたどうして？」

東「恋人が言うには、知らん！；、らしいよ」

白夜「へーまあ元を潰せば何とかなるか」

東「え、協力してくれるの？」

殺那「まあ、うちの事件について協力してくれるからな。」

フィリップ「こっちも少しは恩返ししないと。」

東「びやっくん、せつくん、ふいーくん、ありがどう！」

白夜「とりあえずそのアジトとやらへ行ってみるか。篠ノ之博士、「東でいいよ」ん

じゃ東、道案内よろしく。」

東「任せなさい！」

こうして、彼らは夜の空を飛び立った。

## 03：事件

（某国上空）

No side

とある国の上空で、白夜達は亡国機業のアジトへ向かって飛んでいた。

東「ほんとに生身で飛べるんだ…」

白夜「まあな」

殺那「一応人外だからね」

フィリップ「それに、飛ぶのは結構好きだしね。」

東「（\*・ω・）（\*—ω—）（\*・ω・）（\*—ω—）ウンウン♪それすつごく分かるよ」

そんな気の抜けた会話をしていた時、東はふと静かに切り出した。

東「ほんとにありがとね。でもなんで完全にこっちの事情なのにここまで協力してくれるの？」

東はずつと疑問に思っていた。どうしてここまで助けてくれるのか？と。正直言えば彼らはほぼ他人だ、いくら打ち解けたからといっても彼らがそこまでする義理はな

い。しかも、スクール達に至つてはそもそも面識すらない。だからこそ聞かずにいられなかった。

白夜「さあな…ただなんかほつといたらその後メツサ目覚めが悪いことになりそうだったからな。」

殺那「まあなんとなくほつとけなかつたからね。」

フィリップ「それに、この事件の中にもしかしたらうちの事件の手掛かがあるかもしれないしね。」

束「びやっくん、みんな、ありがとう。」

クロエ「私からも、ありがとうございます。」

白夜「気にするな」

クロエ「そして、間もなく目的地周辺です」

ズコツ

空中で盛大にズツコケて、アジト前に着いた。

亡国機業、アジト

某国の街から離れた小さな林に巨大なビルが建っていた。そのビルの死角に五つの影が潜んでいた。

白夜「着いたのはいいがこれからどうする？」

東「確かこのビルの22階の角辺りがスコリーユンの部隊の部屋だったよ。みんなそこにいるみたい。」

殺那「いや、角ってどの角？」

東「う〜ん、確かここに…あ、あつたこれがスコリーユンの部屋までの道のりだよ。赤いエリアがスコリーユンの部屋ね。」

東は荷物を漁ると、一つの空中投影ディスプレイを見せた。そこにはビルのフロアの地図が映っており、地図の一角は赤く染まっていた。

白夜「OK、大体分かった。悪いが少し離れてくれ。」

東「びやつくん、一体どうするの？」

フィリップ「少しすれば分かるよ。」

東の質問にフィリップが軽く答えた途端に、白夜は全員目の前でスキマを開いた。

東「な、な、な、ナニコレ!？」

クロエ「め、目玉がたくさんありますね…。」

殺那「これはスキマって言って、早い話ここをくぐれば目的地まですぐ着くぞ。」

東、クロエ「は、はあ〜。」

東とクロエは、それに驚いたが刹那が雑な説明をしたため、とりあえず納得すること



にした。

白夜「んじゃ、時間も時間だし行くぞ。」

彼らはスキマを潜っていった。

〈亡国機業、アジト（スコールの部屋）〉

スコール side

私はスコール・ミューゼル、唐突だけど私はひどく混乱しているわ。だっていきなり目玉だらけの裂け目が出来たと思っただらそこからいきなり、

東「やつほースコーリユーン（\*、▽、）」

天災<sup>バカ</sup>が出て来たんだから。それに東の助手のクロエと…後の三人だれ？しかも男って、戦力が増えるのは嬉しいけど使えるの？

???「つち、男かよ。おい！東、こいつら使えんのか？」

東「まーまーおーちゃん、びやつくん達は戦力になるかは分かんないけどこんなものを作るんだから、多分問題ないよ。」

殺那「かなり辛辣だまっておーちゃん？つてか誰がスコール？」

東「金髪でおっぱい大きい方だよ。」

スコール「もうちよつとましな紹介の仕方はないのかしら？まあ良いわ、私がスコー

ル・ミューゼルよ。で、こっちが恋人の」

オートム「オートム・ミューゼルだ」

白夜「博麗白夜だ、気軽に白夜で良い。」

殺那「闇代殺那だ、同じく殺那で良い。」

フリリツプ「フリリツプ・ワーム、フリリツプで良いよ。」

スコール「ご丁寧にどうも、私もスコールでいいわ。」

オートム「俺もオートムで良いぜ。」

とりあえず自己紹介をしたけど：肝心なことを聞いていない。

スコール「ところで、あなた達って戦えるの？」

そう、戦力になるかどうかだ。私たちは乗っ取られた亡国機業を奪還することが目的だ、なのに戦力にならないなら正直言って邪魔でしかないわ。

白夜「それに関しては問題ない。むしろ心配なのはお前らだ。」

オートム「んだと！てめえ」

スコール「落ち着きなさいオートム。で、理由を教えてくれないかしら。どうして私たちが足手まといになるかを。」

正直私もイラッと来た。だけど彼も何の考えもなしに行つた訳ではないことはすぐに分かった。だって彼の目が怖いくらい真剣だったんだから。そして出てきた答えに

私は絶句した。

白夜「簡単だ、お前らは人間、もしくはI Sでの戦闘はかなり経験してるだろうが、それ以外での戦闘は皆無だからだ。」

スコール「人間とI S以外？」

白夜「そうだ」

オータム「例えばどんな奴だよ？」

白夜「今回の奴は十中八九セレブロだな」

スコール、オータム「セレブロ？」

フィリップ「セレブロとは、他の生物に寄生して寄生された生物の住む星を自滅させる『文明自滅ゲーム』をすることを生きがいに行っている寄生生物だ。ゲームの駒はその星で様々だ、この星だと恐らくI Sだろうね。」

スコール「文明自滅ゲーム……」

オータム「なんて悪趣味な野郎だ！」

正直この子たちの話は全く信じられなかった。だけど、彼らがこの期に及んでくれない冗談を言うとも思えない。だからとりあえず信じてみることにした。

殺那「そーいやさつきから東の奴えらく焦ってるけどどうした？」

東「ねーねースコーリユン、まどっちは何処？」

s i d e o u t

東 s i d e

スコリーユンとおーちゃんは無事で一先ず安心した、だけど一人だけ見当たらない人物がいる。まどつち、織斑マドカだ。彼女は結構特殊だけどちーちゃんといっくんの妹なんだよね。それは置いといて、まどつちどこ行つたんだろう？取り敢えずスコリーユンに聞いてみよう。

東「ねーねースコリーユン、まどつちは何処？」

スコール「Mは、今はいないわ。」

東「え、」

白夜「何があつた？」

オータム「それが…変な男が亡<sup>う</sup>国機<sup>ち</sup>業の奴らを洗脳してつてるときにMにはUSBメモリみたいなやつを挿し込んだんだ。そしたら変な怪物になつて暴れだしたんだ。」

東「それつてもしかして…」

白夜「間違はなくガイアメモリだな、つて襲撃者つてお前らと面識ないのかよ。」

スコール「あれ？言つてなかつたつけ？」

殺那「おん」

フィリップ「まあ、とりあえず作戦は、

1、洗脳された奴らが無効化する

2、マドカを助ける

3、謎の男（に寄生したセレブロ）を倒す  
で、いいかな？」

東「ふいーくん、すごいアバウトだね。」

白夜「まあそんぐらいしかないだろ。」

オータム「そーだな！」

殺那「操られてる人間は任せた。」

スコール「わかったわ。」

東「まどつちのこと頼んだよ！」

クロエ「（わたしずつと空気だったような…）」

白夜「ごめん、すっかり忘れてた」

クロエ「読心術でもあるんですか？」

白夜「いや、心自体を見た。」

クロエ「もういいです。」

なんか少し締まらないけど、とにかく頑張ろう！

白夜「んじゃ、とりあえず。」

ん？びやつくん達の雰囲気之急に変わったけど…一体何するの？ってかふいーくん  
 なんて下腹部に両手かざしてるの？これじゃまるでクウg…

(アークル) <〜♪♪>

(ネオデイクイドライバー) <〜♪♪>

(ジクウドライバー) <ジクウドライバー♪>

え？ちよつと待って、びやつくんがデイクイドライバーを腰につけたんだけど、しかもマゼンタの方の(語彙死亡)ってせつくんはジクウドライバー!?待ってふいーくんはアークルを出したんだけど!

<ブウウン、シャキンツ>

<カチカチ、ZII-O>

ちよー、びやつくんなんかカード出したんだけど!?せつくんも時計みたいなの  
 だしたしZII-Oってなったし!ふいーくんも右手を腕ごと右に動かしながらバツク  
 ルに添えた左手を腰の左側のスイッチに移動させちゃったよー!これってまさかマサ  
 カ!?

白夜、殺那、フィリップ「「「変身!」」」

(アークル) <〜♪♪>

(ネオデイクライドライバー) <kamenride decade>

(ジクウドライバー) <rider time kamenrider ZI—O>

キターーーーーー!!びゃつくくんがデイクライドに、せつくくんがジオウに、ふいーくんが

クウガになつたーーーーー!!!!!!

もう東さんのテンションはフォルテツシモだよーーーーー!!!!!!





クロエ「東様！落ち着いてください！」

スコール、オータム「ナニコレ!」

結構カオスになった。

白夜<sup>デイクイド</sup>（以下<sup>デイクイドU</sup>）「よし、行くか。」

スコール、オータム、東、クロエ「「いやちよつと待て」」

<sup>デイクイドU</sup>「(。・ω・)ん?」

オータム「(。・ω・)ん?じゃねえよ!なn「東「なんでびやくん達の変身したライダーにはカラータイマーみたいなの付いてるの!」」いや俺のセリフ…つてそこはどうでもいいだろ!」

東の言う通り、白夜達の変身しているライダーにはカラータイマー（白夜にはハート型の碧、殺那は白夜と同形状で紫、フィリップは菱型で濃緑）が付いていた。

<sup>デイクイドU</sup>「ああ、言っただけで俺ら種族的にはウルトラマンなんだよ。それで本物と区別するために付けてる」

東「…なんかもう驚くんも疲れたよ…」

<sup>デイクイドU</sup>、殺那<sup>ジオウ</sup>（以下<sup>ジオウUD</sup>）、フィリップ<sup>クウガ</sup>（以下<sup>クウガB</sup>）「「お疲れです。」」

クロエ「そういえばオータム様、何か言いたかったのでは?」

オータム「もういい……」

スコール「ツッン、そろそろ行きましょう。時間が惜しいわ。」

デイケイドU「それもそうだな、んじやみんな頑張ろう！」

全員「おおー!!!」

彼らは出発した、仲間を救うために、自分たちの居場所を取り戻すために!!

ジオウUD「そんな壮大な話だっけ？」

東「めっちゃ端折るとそんな感じだよ」

なんかしまらないな。

—数時間後—

場所は変わってアジト最上階の廊下、そこではデイケイドU達（ライダーのみ）が、

デイケイドU「ハッ！」

ドガッ!

回し蹴り

ジオウUD「フッ！」

ドンッ!ドンッ!

ジカンギレード（銃）での射撃

クウガB「……ッ！」

バキッ！

避けてからの鳩尾へのカウンター（殴）

を多用しながら、人型機械ロボ（早い話ビルドのガーディアン）達と戦っていた。

東達人間組は、ISを纏い、

東「ホイッ！」

ドスッ！

鳩尾を殴り

クロエ「フンッ！」

ゴチンッ！

杖での頭を殴打

スコール「ハッ！」

バキッ！

ウナジ殴打

オータム「オリヤッ！」

バキッ！

ブレード（爪）での峰打

などで操られた人間達を気絶させていた。

スコール「これで最後ね。」

クロエ「彼らも終わるようですね。」

デイケイドUがライドブツカーをソードモードにして、デイケイドライバーにカードをセットし、

《attack ride slash!》

デイケイドU「ハアッ!」

一閃した瞬間刀身がマゼンタ色に分身し数体のガーディアンを斬りつけ、破壊した。

ジオウUDは銃モードのジカングレードの上部のボタンを押し、

《time charge! 5 4 3 2 1::zero time!》

ジオウUD「ハッ!」

トリガーを押し、

《ストレス撃ち!》

「ジュウ」の文字型のエネルギーを放ち、数体のガーディアンを撃ち抜いた。

クウガB「オリヤッ!」

クウガBは足裏に封印エネルギーを溜め、ガーディアン達に横蹴りを放ち、爆散させた。

その場にいた全てのガーディアン達を破壊した彼らを彼女たちは感心半分、驚き半分

という表情を見ていた。

クウガB「あ、そっちは終わったんだ、お疲れ様。」

ライダー達の戦闘を見ていた彼女達にクウガBは疲れた様子もなく労いの言葉をかけた。

IS組（いや…それはこっちのセリフだ！）

彼女たちの気持が一つになった瞬間だった。

廊下を移動中、ふとオータムが、

オータム「つてかお前らスゲーな、一体どんな修羅場抜けて来たんだ？」

と、言ってきたどうやらさっきの戦闘で彼女の中で彼らの評価が上がったようだ。

ジオウUD「まーねー。そりや色々」と

ジオウUDがまんざらでもないように答える。

東「でも、本物のライダーとは戦闘スタイルが全く違うね。」

デイケイドU「永い間戦ってきたからな、俺達は俺達の戦い方がある、オリジナルが違うのはしやーなしだな。」

スコール「へー、ちなみに戦闘経験はどれくらい？」

デイケイドU「少なくとも見積もって五億年だな。」

スコール「は、？」

予想の斜め上の回答に彼女は素っ頓狂な声しか出なかった。

クロエ「白夜様、それはどういう。」

デイケイドU「説明は後だ、もうそろそろラスボスの部屋の前だし。」

という彼の前には、大きめの扉が鎮座していた。

スコール「この階にはもうこの会議室しかないわよ。」

デイケイドU「んじや行くか。」

デイケイドUが扉を開け、彼らは会議室に向かった。

く亡国機業アジト、最上階（会議室）く

???「待っていたよ、仮面ライダー諸君。」

会議室に入った途端、黒いスーツを着た男が、まるで嘲笑うかのように言ってきた。

白夜達はあぜん：

全員（うつわすつげえ偉そう）

いやあきれていた。

セレブロ「わたしはセレブロ、このゲームのゲームマスターだ。」

デイケイドU「うんそれはどうでもいい。俺が聞きたいのはこいつだ。」

と言うと、デイケイドUはスキマから一機のボロボロになったラファール・リヴァイ

ブを取り出しセレブロの前に投げ捨てた。

デイケイドU「これを幻想郷に送ったのはお前か？」

セレブロ「ああ、これか。その通りさ、幻想郷にいる最強の3人、君たちを呼ぶためにね。」

デイケイドUの質問に意気揚々と答えるセレブロ、デイケイドUはさらに質問を続けた。

デイケイドU「何のために？」

セレブロ「簡単なことさ、ゲームを面白くするためだ。そのために十年前から準備をしていたのだからな。」

東「十年前って、まさか?!」

セレブロ「そうだ！十年前世界中の軍事基地のコンピュータにバグスターウイルスを忍び込ませ、核ミサイルのコントロールを奪った。元々この星には興味がなくて早々に終わらせようと思ったからね。だけど、予想外の存在がいた、それが君だ篠ノ之東。」

東「東さん？」

セレブロ「そうだ。まさかこちらのハッキングに気付き、ウイルスの目標をを通常ミサイルに移させた上に発射されたミサイルを当時の兵器の性能を凌駕するほどの力ですべて撃ち落とした。あの時ほど興奮したことはなかった。そして、俺は新しいゲームを練り上げそれに組み込むことにしたのさ。」

クウガB「それで、ここを占拠したのは何故だい？」

セレプロ「ここにいる織斑計画プロジェクトモザイクの試験体を手に入れるためだ。」

ジオウUD「プロジェクトモザイク？」

東「通称織斑計画、究極の人類を作ることを目的とした禁忌の計画だよ今までに1002体の試験体を作られて打ち止め、成功例はたった二体：いや二人、1000番目の織斑千冬ちかふゆと1001番目の織斑一夏いっかだけだった。」

デイケイドU「なんで打ち止めになったんだ？」

東「それは、天然物東さんが見つかったからだよ。計画が打ち止めになってからは二人は一緒に暮らしてるんだけど：その二人の他にたった一人生き残った失敗作がいたの。」

セレプロ「それが試験体No.1002、織斑マドカだ。」

デイケイドU「なるほどな、だいたい分かった。それで、その失敗作を手に入れて何をするつもりだ？」

セレプロ「いや、どうもしないさ。」

デイケイドU「なに？」

セレプロから出たまさかの返事にデイケイドU達はただ疑問でしかなかった。そんなことは意に介さずセレプロは続けた。

セレプロ「あの試験体は駒としては物足りなかった。だからここで死んでもらおうと



思ってたね。だけど、このまま殺すのは面白くなかったからね、君たちと殺し合いをしてもらうことにしたよ。」

セレブロはそういうと、空間にワームホールを開いた。そして、そこから黒い騎士の姿をした異形がゆっくりと歩いて出てきた。

スコール、オータム「M！」

東、クロエ「え!?!」

スコールとオータムの言葉に、東とクロエは驚きのあまり絶句した。

セレブロ「精々あがくといいこのナスカの前でな」

そういうと、セレブロはもう一度ワームホールを開き、

セレブロ「それでは俺は、ゲームを次のステージに進めるとしよう。」

ジオウUD「待てっ!!」

それを潜って消えた。それと同時に黒いナスカ（以下ナスカM）がデイケイドU達の前に立ち塞がる。

ナスカM「∴」

ズシャツツ!

ライダーズ「ニ——ツ?!?!」

ナスカMが超高速でライダー達の懐に近付き切りつけ、デイケイドU達は咄嗟のこと

で反応出来ず、派手に吹っ飛び変身が解除され、膝をついていた。

白夜「いつつく…やべえ油断した〜」

殺那「つてかこいつ他のナスカより強くね？」

フィリップ「確かに、多分オリジナル若菜姉や義兄さんより高いレベルに到達しているだろうね。」

そんな話をしてる所に東達が近づいてきた。

東「まだどつちは…まだどつちは助かるの？」

今にも泣きそうな震え声でそう白夜達に訪ねて来た。

白夜「まあ、メモリブレイクすれば。」

フィリップ「少々骨が折れるだろうけどね…」

殺那「まあ大丈夫でしょ。」

オータム「なんでそんなボロボロになってまで戦えるんだ？」

白夜、殺那、フィリップ「二」知らね、昔っから気まぐれでやってたことだ「三」

オータム「ええ〜…」

オータムが心配そうに問い掛けに馬鹿らしい答えが返ってきた。

白夜「まあとりあえずあいつを何とかするか。フィリップ、半分力借りるぞ。」

フィリップ「了解」

殺那「うし！いつちよやるか。」

というとならば立ち上がり、白夜は赤く二つの差込口のあるバックル、「ダブルドライバー」を殺那はバイクのハンドルとメーターを模して、差込口が一つあるバックル「アクセルドライバー」をどこからか取り出し、二人がそれを腰につけると、ファイリツプの腰にも白夜のドライバーと同形状のドライバーが出現した。すると、ファイリツプは彼女たちに

ファイリツプ「済まないが、僕の体を頼めるかい？」

と言い、束は若干興奮気味に承諾し、ほかの三人は束の反応に少し引きながら承諾した。

白夜は黒にJのイニシヤル、ファイリツプは緑にCのイニシヤル、殺那は赤にAのイニシヤルのUSBメモリのようなものを取り出し、メモリのスタートアップスイッチを押した。

Cyclone

Joker

Acceler

白夜、殺那、ファイリツプ「変身！」

メモリを起動させ、ファイリツプがサイクロンメモリを自身のドライバーの右側のスロットに挿し込んだ瞬間、彼の意識と共にメモリが白夜のドライバーに中途半端に挿し

込まれた状態で転送され、白夜がそのメモリをしつかり挿し込み、自身のジョーカーメモリを左側のスロットに挿し込んで、ドライバを左右に展開した。

殺那は、アクセルメモリをドライバースロットに挿し込み、右側のグリップを捻った。

Cyclone Joker  
Acceler

白夜は風に包まれ、殺那はバイクのエンジン音と共にそれぞれ、仮面ライダーWU、B Cyclone Joker、仮面ライダーアクセルUDに変身した。意識のないフリーリップの体は変身の時の風で吹き飛ばされ、束がキャッチした。

WU・B 「『さあ、お前の罪を、数えろ』」

アクセルUD 「さあ、振り切るぜ」

決め台詞を言った後に、二人のライダーはナスカMに向かって走り出した。

WU・B 「ウオリヤツ！」

アクセルUD 「セリヤ！」

WU・Bが左ストレートを放つたのを皮切りに、アクセルUDがエンジンブレードでの斬撃、WU・Bが蹴り主体の格闘をそれぞれナスカMに繰り出していった。

アクセルUD 「やっぱ剣使いにくいな、俺いつも射撃主体なんだけど」



Cyclone Joker

JokerMaximumdrive

AccelMaximumdrive

WU・B「『ジョーカーエクストリーム!!』」

アクセルUD「アクセルフルロットルシュート!」

WU・BはふたたびCycloneJokerにチェンジしてジョーカーメモリを腰の右側にあるマキシマムスロットに挿し込み、アクセルUDはトリガーマグナムにアクセルメモリを挿し込んだ。

WU・Bは風と共に浮き上がり、そのままドロップキックを途中で左右に分裂しながら、アクセルUDはトリガーマグナムからバイクのような轟音と共にこれまたバイクのような赤い幻影と共に、一発の銃弾をナスカMに撃ち込んだ。

ナスカM「……!」

ナスカMは一瞬驚いたように体をこわばらせたが、二人の必殺技を受け、爆発。マドカはその場に倒れこみ、メモリは体から排出され、そのまま砕け散った。

WU・BとアクセルUDは変身を解除し、それと同時にフィリップの意識が戻る。

フィリップ「一件落着。とは言えないな」

白夜「セレブロは逃亡、亡国機業はほぼ壊滅、おまけにあいつの目的がイラつく」

殺那「最後は完全な私怨じゃねえか」

スコール「でも、私達これからどうしましょう」

殺那「亡国機業の幹部はほぼあいつにやられたからな。指揮系統が消えれば組織はただの烏合の衆だからな。」

オータム「亡国機業が使い物にならなきや俺らの居場所ないぞ。」

東「さすがの東さんもこんな規模の大きい組織の立て直しは難しいよ。」

クロエ「どうしましょう。」

亡国機業は一部幹部、一般工作員以外死亡、正直組織としては完全に機能しておらず、彼女たちは今後のことについて話し合っていた。

白夜「しゃーない、歴史変えるか。」

殺那、フリリップ以外「「え!?!」」

白夜の爆弾発言に彼女達は驚きのあまり絶句した。

## 05：日常とフラグ

く日本、RFC本社ビル（社長室）く

都心のビル街にある一棟のビル、その最上階にある一室に一人の金髪の女性、スコール・ミューゼルが、

スコール「はあく」

机に突っ伏して頭を抱えていた。原因は三人の少年、特に彼女の目の前にあるソファでくつり：もとい仕事を一段落させて休憩している白髪オツドアイの少年にある。時は3年前まで遡る。

く亡国機業、アジト、3年前く

戦闘が終わり、ボロボロになった会議室に七人の男女が話し合っていた。

オータム「で、歴史を変えるってどうすんだよ？」

内容は数分前の

白夜「歴史変えるか」

という発言から始まった。

スコール「そもそもそんなことって可能なの？」



白夜「オーマジオウと慧音の能力を使えば簡単だ。」

東、クロエ「あ、納得」

スコール、オータム「なんで(だ)?」

白夜の発言に突然納得した東とクロエに疑問を投げかけるスコールとオータム。彼女たちの疑問に白夜は淡々と答えた。

白夜「オーマジオウは歴史を破壊して創造する能力がある。それで一度歴史を作り替える、その際に慧音の能力である『歴史を食べる程度の能力・歴史を創る程度の能力』つてのを使って微調整する。」

スコール「なるほどねえ大体わかったわ。だけど、歴史を変えた場合私たちはどうなるの?」

白夜「そこらへんは大丈夫だ、改変する際に結界を張って俺達のいるこの空間を他と隔離するから。」

東「結界?」

白夜「百聞は一見に如かずだ、まあ見てろ。変身!」

そして、オーマジオウUになった白夜は、慧音の能力と合わせながら歴史を変えていった。改変後の歴史は亡国機業はテロ組織だったのは今から50年前までということになり、現在は東とスコールが設立したIS関連企業『ラビット・ファントムカンパ

ニー（通称RFC）の秘密実働部隊兼暗部として存在し、活動目的はISテロリストの壊滅とそれに関する情報収集などである。

く現在く

スコール「今更だけど、テロ組織から裏世界の必要悪ってかなり無理があるんじゃない？」

白夜「そこらへんはご都合主義の連続で、」

スコール「ご都合主義って…」

白夜「歴史なんてそんなもんだろ」

スコール「ぜったい違うわ！」

白夜「そもそもセレブロ襲撃の時にたまたま俺らがこの世界に来てたのもある意味のご都合だろ。」

スコール「うっ…」

???「失礼します。」

白夜とスコールが軽口を言い合っているところに、一人の少女、織斑<sup>マ</sup>万夏<sup>ド</sup>が社長室に入ってきた。

万夏「部隊の機体メンテナンス、異常ありませんでした。」

スコール「お疲れ様、万夏。そんなに固くならなくても大丈夫よ。少し休んでいった

ら？」

万夏「そうさせてもらおう、スコール」

そういうと彼女は、白夜が座っていたソファアとは反対のソファアに腰を下ろした。

円夏「ふう〜」

白夜「だいぶ疲れてんな、少し休んだら？」

円夏「そうしたいんだがな、来年の I S 学園の入試勉強だのなんなので中々な。どうか、お前も仕事量で言ったらお前も私とそんな変わらんのだろ。」

白夜「あのくらいならまだ余裕だ。時間止めてやってるから。」

スコール、円夏「人外（が）」

そんな日常（？）の会話を楽しんでいた時

キイイイン キイイイン

白夜「:!?!」

スコール「いきなりどうしたの？」

突然立ち上がった白夜に、スコールは疑問を投げかけ、円夏も困惑していた。

白夜「（そーいやくの音、ライダー以外聞こえないんだったな：例外はあるけど）ん？

まあ仕事だ。」

そうとうと白夜は黒い長方形の真ん中に龍の紋章を模ったカードデッキをソファア

の近くにあった姿見にそれをかざした。

すると、白夜の腰に銀色のベルトが出現し、

白夜「変身！」

そのベルトのバックル部分にカードデッキを嵌めた。

すると、白夜は紅いアンダーズーツに中世の甲冑のようなものを身に着けたライダー、龍騎Uに変身し、

白夜「んじゃ、行ってくる。」

そういつて龍騎Uは鏡の中、ミラーワールドに入ってしまった。

（廃工場）

side

「キヤアアアアアア!!!」

「簪ちゃん!!」

私は今何処かの廃工場で妹の簪ちゃんと一緒に謎の化け物に襲われている。なぜこんな突拍子もないことになったかと言えば、たまたま私達と側付きのメイド二人の計四人でこっそり遊びに行つて変な男達にメイド二人を除いて誘拐されて、この廃工場に連れてこられたかと思つたらいきなり金切り音が部屋中に響いて男達が全員金属製の壁の中から出てきたヤゴみたいな人型の何かに文字通り喰われた。

そして、今度は恐怖で動けない簪ちゃん的首元へ、噛みついた。私は目の前が真っ白になった。もし私のISが点検中でなければ、もし一人でも護衛と監視を付けていたら、もし私に、もつと力があれば……

そんな茫然としていた私の耳に微かに音が響いた。

## A D V E N T

その声と共に目の前を黒いナニカが横切った。

## N O s i d e

龍騎Uはミラーワールドに入った後、リュウガUD那とナイトBファイリッブと合流し無数のミラーモンスター、シアゴーストと交戦していた。

龍騎U「はあ、はあ、まったく弱え癖に数が多いな。」

ナイトB「確かに、この数は、弱体化した今の僕たちにはキツイね。」

そういう彼らの息は上がっていた。3年前、にURZバックル等の装備を修理（という名の太陽への打ち上げ）していることよって、彼らはクウガというグロージング、エポルトというブラッドスターク並みに弱体化している。

すると、リュウガUDが何かに気付いた。

リュウガUD「なあ、こいつら外に出よとしてない？」

シアゴースト達が廃工場の金属壁からミラーワールドの外へ、でていたのだ。

龍騎U 「取り敢えず外出たやつは頼んだ」

リュウガUD 「了解」

そういつてリュウガUDはシアゴースト達が出ていったのと同じ壁からミラーワールドの外へ出ていった。

リュウガUD 「(いた! ってこいつなに人喰おうとしてんじやマジで!)」

リュウガUDが外に出た時に最初に見たのは、2人の水色髪の少女が逃げてきたシアゴースト達に襲われている瞬間だった。しかも片方(髪が内側に跳ねている少女)に至つては、首元を噛みつかれていた。

彼はすぐに黒い龍が描かれたアドベントカードを取り出し、左腕のブラックドラグバイザーに装填した。

A D V E N T

その瞬間、例の金属壁から黒い龍「ドラグブラッカー」が飛び出し、逆にシアゴースト達を食い散らかし、首元に噛みついてた奴はリュウガUDが殴り飛ばしたところをドラグブラッカーに喰われた。

噛まれていた少女は何とか解放できたが、急所を突かれていたため大量に出血し既に虫の息だった。

??? 「簪ちゃん!!」

倒れた少女をもう一人（髪が外側に跳ねた）少女が抱き寄せる

簪 「おねえ、ちや、ん」

??? 「簪ちゃん!!! 簪ちゃん!!!」

簪 「おねえ、ちや、ん、ごめ、ん、なさい、」

??? 「簪ちゃん？」

簪 「私、本当は気付いてたんだ、お姉ちゃんが、私に、あんなこと言ったのも、私を、守ろうと、してたんだ、って、」

??? 「簪ちゃん！いや！死なないで！おねがい、」

途端に泣き崩れる少女。そんな少女に簪はゆつくりと手を伸ばし、

簪 「おねえ、ちゃん、ごめん、ね、」

そういうと彼女は静かに目を閉じた。

??? 「簪ちゃん!! 簪ちゃん!! うああああああん！」

静かな廃工場に少女の泣き叫ぶ声が響く。

リュウガUD 「すまない、君の妹を助けられなかった。」

??? 「…うう」

リュウガUD 「ただ、この娘の蘇生は出来る。」

??? 「え!？」

リュウガUD「本当は乱発できないんだけどな」

そういうとリュウガUDは一枚のアドベントカードを使い

SWORDVENT

召喚した黒いドラグセイバーで自分の手を斬りつけ、

リュウガUD「蘇生<sup>イソガル</sup>」

滴った血液を簪に垂らし、蘇生魔法を施した。

簪「…んんっ」

簪がゆっくりと目を開く。

???「簪ちゃん!!!」

簪「お姉ちゃん?」

ガバツ

簪「え?」

???「かんざしぢやくん、よがっだろ、よがっだよ」

簪「お姉ちゃん、心配かけてごめんね」

少女は生き返った簪に抱き着きずっと号泣していた。そんな少女を簪は優しく抱き

返していた。

簪「お姉ちゃん、危ない!!」



??? 「へ？」

簪が叫び、少女が振り返ると、そこには一匹のシアゴーストの進化形態、レイドラグーンが少女に襲い掛かっていた。

ガキンツ!!!

レイドラグーンが自分の鎌を少女達に振り下ろしたその時、リュウガUDはドラグセイバーでその鎌を受け止め、

リュウガUD 「セリヤ！」

ザシュツ!!!

鎌を弾いてレイドラグーンを縦に両断した。

リュウガUD 「つち、もう羽化したのかよ。お前ら怪我無いか？」

簪 「え、リュウガ？」

??? 「簪ちゃん？」

簪 「やっぱり！仮面ライダーリュウガだ！」

??? 「簪ちゃん、この人のこと知ってるの？」

簪 「うん、仮面ライダーリュウガ。ミラーワールドの仮面ライダーで主人公の虚像が変身していてライダーバトルでは主人公の龍騎を上回る戦闘力で……」

眼をキラキラさせて語る簪に少女とリュウガUDは若干引いていたが、それをリュウ

ガUDが手で制した。

リュウガUD「熱弁してる所悪いけど、俺本物のリュウガじゃないぞ。」

簪「え!？」

リュウガUD「ほら、胸の真ん中に紫のクリスタル嵌ってるし、俺、どちらかと言ったらディケイドがカメンライドしてみたいなもんなんだよ。だから見た目とスペックは同一だけど本物とは全くの別物だよ。」

簪「そうなんですか、」

少ししよんぼりしてしまつた簪を見てリュウガUDは（なにこのかわいい生き物）と若干思いながら、簪の頭に手を乗せて、

リュウガUD「まあ、少なくとも今の俺は仮面ライダーリュウガだ、お前たちぐらいは守つてやるよ。」

そう告げると、リュウガUDは金属壁へ向かいミラーワールドへ入ろうとしたとき、  
???「待つて!」

少女に呼び止められ立ち止まり。

リュウガUD「どうした？」

刀奈「私の名前は更識刀奈、こっちは妹の簪よ。改めて、妹を救つてくれてありがとう。」

簪「簪です。死んでしまった私を救ってくれて、ありがとうございます。」  
頬を若干紅くしながらお礼をした。

リュウガUD「刀奈と、簪か。覚えておくよ。俺の今の姿は仮面ライダーリュウガUD、本名はわけあって教えられなくてごめんね。んじや、また会えたらな。」

そういつてリュウガUDは今度こそミラーワールドへ入っていった。

彼女たちはその後、駆け付けた使用人（と護衛）に無事保護されたが、2人がまた仲睦まじい様子でいたことに若干驚いたがすぐに安堵し、事情を聞いたときときに二人とも頬を紅く染めながら

刀奈、簪「仮面ライダーが助けてくれた」

と、証言したことに首を傾げという。

リュウガUDは、ミラーワールドへ戻ってすぐに龍騎UとナイトBと合流し、羽化したレイドラグーンを殲滅した。

その時にリュウガUDのテンションが若干高かったのを不思議に思い聞いてみたら、リュウガUD「美少女2人を助けたらお礼言われた。」  
と、言われあゝそりゃテンション高いわと納得した。

## 06：勧誘

ミラー<sup>害</sup>モン<sup>虫</sup>スター<sup>駆</sup>退治<sup>除</sup>から数ヶ月後の3月上旬、世間では高校受験でにぎわう時期、世界を震撼させる事件が起きた。なんと、世界で初の男性IS操縦者が出現したという。しかもそれが<sup>ブリュンヒルデ</sup>織斑千冬の弟である織斑一夏となれば世界中が騒ぎ出すのも無理はない。ただ一つの企業を除いて。

↳ R F C、会議室↳

東「ふっふっふっ皆の衆、ついにこの時が来たのだよー!」

円夏「兄さんがISを動かした。」

クロエ「このためにわざわざ試験会場までの誘導しましたからね。」

白夜「つてかIS学園の試験会場、セキュリティガバガバ過ぎない?」

フィリップ「確かに、あれは軽く引いたね。」

スコール「んんっ、それはそれとして、東の妹さんはどうするの?」

殺那「一夏と一緒に連れていけば良いんじゃない?あの二人幼馴染だろ。」

オータム「俺もそれに賛成だ。」

白夜「んじや、決行は明日の午後2時。それまでに東は一夏、千冬、箒の3名に連絡

を頼む。以上」

全員「了解！」

こうして、R F C幹部による一夏、箒の勧誘計画がスタートした。

翌日、R F C、応接室

R F Cの応接室、その部屋のソファに2人の人間が座っていた。言わずもがな千冬と一夏である（移動は箒も一緒だったが、途中で別室へ通された）。

千冬「なぜ、束がこんな所に呼び出したんだ？」

千冬はもちろん、内心混乱していた。なぜなら篠ノ之束という人間は神出鬼没であり、彼女達に用があるならまず自分から会いに行くタイプであり、呼び出すなんてことはまずしないのである。彼女が一夏の方を見れば、彼も困惑しているのか、若干落ち着きがない様子だった。そして、

—ガチャ

待つこと数分、1人の金髪の女性と白髪の少年が入室してきた。言わずもがなスコールと白夜である。そして、スコールは千冬たちが座っているソファと対面のソファに座り、白夜は部屋の隅の壁に立ったまま寄り掛かった。

一夏「あなたは！」

スコール「2年ぶりね一夏君」

千冬「その節はありがとうございました。」

スコール「いいえ、礼には及びません。私たちは当然のことをしただけですから。」  
彼女たちには面識があつた。

彼女達とスコールの関係は2年前のISバトルによる世界大会『モンド・グロツソ』その2回大会で一夏が誘拐された事件が起きた時に遡る。その時にドイツ軍と共に決勝戦を放棄して一夏を助けに来た千冬と協力して彼を救出したのが彼女たち、スコールとオータムだつた（ちなみに円夏、男組、東達は留守番）。

千冬「それで、私達をここへ呼び出したのは何故でしょう？」

スコール「理由は主に2つ、いえ3つです。1つ目は一夏君、そして箒さんの保護兼勧誘です。」

千冬「保護兼勧誘？」

千冬が威圧を掛けるように問う。

スコール「はい」

千冬「それはどういう？」

スコール「それを今から説明します。」

そういうとスコールは一拍おいて、口を開いた。

スコール「まずは勧誘についてです。これは身もふたもないことを言えば広告塔で

す。」

千冬「ッ！貴様！」

一夏「千冬姉！」

シュツ！パシ！

白夜「気持ちにはわかるが、殴るなら話を全て聞いてからにしてくださいますか？」

千冬「ツチ」

スコールの言い分にキレた千冬が殴り掛かるが、部屋の隅にいたはずの白夜がそれを止め、千冬も渋々席に着き、白夜はまた部屋の隅に移動した。

スコール「先ほどの発言は謝罪します。ですが、そもそも勧誘自体がただの建前で  
す。」

千冬「どういうことだ？」

スコール「そもそも私たちは勧誘等どうでもよく、純粹にあなた方を守りたいだけです。」

千冬「どうしてそこまで？」

スコール「それは私というより東の願いですね。」

一夏「東さんが？」

スコール「はい、東が「女権のゴミ共や無能な政府に大事ないつくん達を渡すものか」

！」と息巻いていたため、それに私たちが乗った形です。それに、一夏君の願いを叶えたいと思ったからです。」

千冬「一夏の願い？」

スコール「はい、一夏君は二年前、第二回モンド・グロツソの時のことを覚えていませんね。」

一夏「…はい、忘れられるわけ、ありません。」

千冬「一夏…」

スコール「その時、君はなんて言ったか覚えてる？」

一夏「『もつと俺に力があれば』と、でもまさかそんな独り言のために？」

スコール「そのまさかよ」

一夏「でもなんで？」

スコール「誰かを助けたいという気持ちに理由なんているかしら？」

一夏「うっ…」

スコール「そういうわけだから、あなたに護衛兼コーチを三名ほどつけようかと。」

千冬「ちよつと待て、一夏のために三人もそつちの人員を割くのか？」

スコール「もちろん、と言ってもそれはこつちの仕事のついでなのだけれど。」

千冬「そつちの仕事？」



スコール「はい。実は一夏君、あなた以外にも男性操縦者が3人いるの。」

千冬、一夏「「え!？」」

スコール「まあ紹介がてら呼ぶわ。入ってきていいわよ。」

殺那、フィリップ「失礼します。」

スコールの突然の発言に驚愕している織斑姉弟を余所に彼女が呼び出すと、先ほどスコールと白夜が入ってきたドアから殺那とフィリップが入ってきた。そして、さっきまで部屋の隅で寝ていた白夜が彼らの前まで移動した。

スコール「紹介するわ、彼らが我が社の企業所属男性IS操縦者よ」

白夜「博麗白夜だ、よろしく」

殺那「闇代殺那だ、これからよろしく」

フィリップ「フィリップ・ワームだ、よろしくね」

千冬、一夏「は、はあ…」

スコール「そんなわけだけど一夏君、君はどうする？」

一夏「俺は、俺は強くなりたいです。もう千冬姉に頼ってばかりなのは嫌なんです。」

千冬「一夏…」

一夏「だから、最低でも自分の身ぐらいは自分で守れるように、なりたいです。だから、

だから俺を鍛えてください！」

白夜「ああ、いいぜ」

一夏「え？」

白夜「いや、そこまで間抜け面になんなくても…まあとにかく、一ヶ月でマイティキツクを出せるくらいには鍛えてやる」

殺那「いや、マイティキツクわかるやつ今の世代そんないな」「マイティキツクを!?!」わかるんだ…」

フィリップ「はは、まあこれから鍛えてくけど、取り敢えず敬語はいらないよ。」

一夏「え、でも…」

白夜「俺らもIS学園に行くし同年代に敬語使われると落ち着かないんだよ」

一夏「そ、そうか。これからよろしくな。」

一夏と白夜達は、固い握手を交わし、一夏のRFC所属が決まった。

しばらくして、スクールが再び口を開いた。

スクール「それでは、二つ目の理由を説明します。」

千冬「はい…」

スクール「二つ目の理由、それは一夏君、あなたの出生についてです。」

千冬「…?!」

「二夏の出生」。それを聞いた千冬は、体をわずかに震わせ明らかに動揺していた。

一夏「俺の、出生？」

スコール「はい」

千冬「やめろ」

スコール「千冬さん……」

千冬「やめろ！」

一夏「千冬姉？」

スコール「千冬さん、これは一夏君にとつても大切なことですし、第一一夏君自身もうすうす感じているのでは？」

一夏「……!?!、はい」

スコールにそう言われた一夏は、静かに口を開いた。

一夏「俺は、というより俺達姉弟は少なくとも純粋な人間ではない。違いますか？」

スコール「何故そう思うの？」

一夏「料理をしてる時に包丁で指を切つても次の日には傷跡もなく治つてますし、階段から落ちてても痣一つ出来たことないなんて、いくら何でもおかしいと思えますよ。」

スコール「そう、確かにあなたの言ったことはあっているわ。これからあなたの出生について詳しく説明するわ。」

一夏「はい、」

スコール「千冬さん、あなたもかまいませんね？」

千冬「ああ、かまわない」

先ほどまで動揺していた千冬も、落ち着いたのか将又観念したのか、静かに肯定した。  
スコール「まずは、こちらをご覧ください。」

スコールは1つの空中投影ディスプレイを取り出し一夏に見せた。

一夏「これは？」

そこに写っていたのは複雑な数式や文字の羅列と一枚の写真だった。

スコール「これは、『プロジェクトモザイカ』もしくは『織斑計画』というものの資料です。」

一夏「織斑計画？」

スコール「織斑計画とは、織斑秋斗という男が発案、研究していた頭脳、身体共に優れた究極の人類を造ろうという計画です。」

一夏「究極の…人類…」

スコール「はい、今までに1002人もの試験体が造られ、成功例はある二例を除いてすべて失敗してしまい、ある時を境に計画は凍結、破棄されました。それは何故か分かりますか？」

一夏はスコールの突然の間に一瞬戸惑うが、その答えはすぐに感づいた。天才的な頭脳に超人的な身体能力、その両方を併せ持った天災ともいえる人間は彼自身の付近には一人しか思いつかなかつた。

一夏「東さん、ですか？」

その言葉に、スコールはほそく笑む。

スコール「その通りよ。天然のオーバーハイスペックである篠ノ之東の存在が確認されたことで、研究は意味を成さなくなつた。そして、そこまでの過程で生まれた1000人目の試験体であり初めての成功例が織斑千冬さん、そして二人目の成功例が織斑一夏君あなたです。そして、千冬さんはあなたを弟として受け入れ、研究所から脱走した。それがあなた方の出生の秘密です。」

一夏「そう…だったんですか。」

「自分は普通の人間じゃない」覚悟していたこととは言え、直接そう言われたことは相当ショックなことで、一夏は俯いたまま少し身体を震わせ、呼吸がわずかに荒くなつていた。

千冬「一夏…」

一夏「千冬姉…大丈夫だ…スコールさん、なんでこのことを教えてくれたんですか？」  
スコール「それは3つ目の理由に関係があります。一夏君、いままで計画で誕生した

試験体は1002人、1000人目が千冬さん、1001人目が一夏君あなたです。では1002人目はどうなったと思いますか？」

千冬「それは…まさか!？」

スコール「紹介します。円夏、入ってきていいわよ。」

円夏「失礼します。」

先程殺那達が入ってきた部屋から織斑千冬に酷似した少女、織斑円夏がはいつてきた。

スコール「彼女は織斑円夏、我が社のIS実働部隊、亡国機業の隊長であり、一夏君、あなたの妹でもあるの。」

円夏「織斑円夏です。初めまして、お兄ちゃん。」

一夏「えええ」

白夜、殺那、フィリップ「「ぶふううつつつ!」」

白夜達は普段聞かない円夏の声に思わず嘖き出した。

一夏「って大丈夫か!？」

白夜「ゲホツ…ゲホツ…大丈夫、少しむせたただけだあいつあんな声出せたのか?」

スコール「いや、私も初めて聞いたわ…まあこの娘が1002人目の試験体で唯一の生き残った失敗例なの。」

千冬「失敗例？」

スコール「はい、彼女は力こそはオーバースペックなんですけど、頭脳は平均並みだったために失敗作となつたらしいです。」

いきなりのことで頭の処理が追いつかない織斑姉弟に、そこで、とスコールは切り出す。

スコール「そこで、彼女を保護したときに私たちはあなた達本当の家族に会わせてあげようと思つたの。でも、そうなると一夏君に秘密にしていた生まれについても話さなければいけない。と、考えて束から「もういつそのことしゃべっちゃわない？ただしある程度成長した中学卒業のタイミングで。」という提案で本当は中学卒業のタイミングで話すことになつていたのですが……」

千冬「一夏がISを動かしたためにタイミングが少し早まったと？」

スコール「はい、これは束も予想外だつたらしく、1日中研究室内で喚き散らしてしまいました。」

千冬「相変わらずの馬鹿が……」

千冬が呆れているところに白夜が口を開く

白夜「それはともかく、俺達は円夏を君たちと一緒に暮らしてやりたいんだが君たちはどうしたい？」

千冬「決まっている、私はこの子と暮らしたい。あの時、私はこの子に気付けなかった。それに、私達と血の繋がっている弟妹きょうだいなら、断る理由もない。幸い金銭面には余裕があるしな。」

一夏「俺も賛成だ。特に拒む必要もないし、めつちや千冬姉にそつくりだから兄妹も違和感ないしな。」

それを聞いた白夜は一瞬ほそく笑むが、すぐに元の無表情に戻る。

白夜「決まりだな、んじや諸々の手続きはこつちでやつとくから。これで事情説明は以上だな、取り敢えずは篠ノ之箒、だっけ？彼女と合流しよう。社内をある程度案内したいからな。」

そう言つて彼らは部屋を出る。しばらくあるくこと数十秒、現在白夜達は箒が案内された部屋の前にいる。スクールがドアの前に立ち、

コンコン

∴

ノックをするが返事が無い。

コンコン

∴

もう一度ノックするがやっぱり返事が無い



スコール「失礼します。」

痺れを切らして部屋を入れてみるとそこには、

箒「ふー…ふー…」

木刀を構え、息を荒くしている箒と、

クロエ「ふー…ふー…」

フライパンを構え、同じく息を荒くしているクロエと、

束「…Ω\と。〜チーン」

頭に2つのコブを付けて気絶している馬鹿<sup>束</sup>がいた。

白夜達はその光景に呆れ言葉も出ず、スコールと千冬に至っては軽い頭痛で頭を抱えた。

一応、箒もRFC所属が決まった…。

# 1学期

## 07：入学

一夏勧誘から一ヶ月後、この日白夜達のI S学園入学の日だ。

「I S学園1—1教室」

真耶「皆さん入学おめでとう。私は、副担任の山田真耶です。」

しーん…

教室内に響く元気な声。だが、それに反応する生徒は誰もいない。そりやそうだ、何  
せ

一夏「(き、気まずい…)」

「クラスメイトほぼ全員はジッと一ヶ所を見つめている。白夜達の席だ。教室の真ん  
中の一番前に一夏、その後ろに白夜、白夜の左に殺那、白夜の右にフィリップ、一夏の  
左隣には円夏、かなり離れた窓側に箒の席がある。そして、クラスメイト(全員女子)の  
視線に気まずそうにしているのは一夏。それ以外の男子共は、

白夜「…zzzz」

殺那「(うわくすっげ〜ww)」

フィリップ「(凄い凄い!机とPCが合体しているのか、何!?空中投影ディスプレイだ?!)まだこの世界では一般に普及したばかりのはず!?大変興味深い…」

こいつら神経図太いわ…

真耶「…斑君…織斑君!」

すると、山田先生から一夏へ声がかかる。

一夏「は、はい!」

真耶「あ、あの〜今自己紹介が『あ』から始まって今『お』なんだよね〜自己紹介してくれるかな?ダメかな?」

あ、先生泣きそう…失礼だけど可愛いな。俺だったら間違ひなく気持ち悪くにやけるな…ゲヘヘ…ゲフンゲフン

一夏「は、はい!します!しますから!そんな畏まらないでください!」  
そう言つて若干緊張で上がりながらも自己紹介を始める。

一夏「お、織斑一夏です。R F C所属で特技は家事全般。趣味は姉の影響で特tツ」

一夏が趣味を言おうとした所で強烈な出席簿アタックが炸裂する。放つたのは勿論織斑千冬だ。

千冬「自己紹介で人の趣味までバラすな馬鹿者が」

「一夏「ツテテ」ちふ、じやなかつた…織斑先生、すみません。」  
頭からプスプスと煙を出しながらよろよろと席に着く。

千冬「さて…私が織斑千冬だ。私の仕事は若干15歳を一人前に育て上げることだ。分からないことがあったら私達に聞け、出来ないことがあれば私達を頼れ、出来るようになるまで指導してやる。以上だ。」

しばしの静寂、そして…

「キヤ—————!!」

「本物よ!本物の千冬様よ!」

「私、あなたに会うためにここに来ました!北九州から!」

もうカオスだ…

千冬「はあ…毎年毎年、馬鹿ばかりだ…まさか私のクラスだけ集中させてるのか?」

気持ちは分からんでもない…

「キヤ—————!!」

「もつと叱って罵って!!!」

「つけあがらないように躡けて—————!!」

「でも時には優しくして—————!!!」

もうカオスだ…

また騒がしくなった教室を千冬の一喝で治め、今度は白夜達の番になった。のだが……

まだ寝ていた。

千冬「いい加減起きろ博麗！」

シュツ、パスツ：

千冬が振り下ろした出席簿を白夜が人差し指と中指で挟んで受け止めた。

白夜「すんません寝てました。」

千冬「初日から居眠りとは感心だな……まあいい、さっさと自己紹介をしろ」

白夜「了解」

白夜は気怠そうに立ち上がって自己紹介を始める。

白夜「博麗白夜だ、一夏と同じでR F C所属で特技は料理と機械いじりと楽器、趣味は特撮、アニメその他サブカルとコスプレだ、よろしく。」

一瞬の静寂、そして、

「キャ~~~~~ツ」

「またイケメンよ——！」

「しかも白髪オッドアイ！」

「白い瞳も綺麗！」

白夜「うわあ…」

白夜はあまりの熱狂ぶりに若干引いていた。

勿論騒ぎは千冬の一喝で納まった。そして次は殺那の番になった。

殺那「闇代殺那だ、特技は射撃と楽器、趣味はサブカルとコスプレだ、みんなよろしく。」

案の定女子達からの黄色い悲鳴が上がり、千冬に一喝される。そして、フィリップの番。

フィリップ「フィリップ・ワームです。特技は検索と楽器、趣味はサブカルチャーとコスプレです。一年間どうぞよろしく。」

案の定女子達から歓声をうけ、千冬の一喝で治まるその繰り返しで最初の授業は終わった。

休み時間に入り、白夜達は一夏の席に集まった。

一夏「はあ〜緊張した〜」

白夜「お疲れ〜」

一夏「うい〜」

円夏「お疲れお兄ちゃん」

箒「まあ、お前にしては良かったのではないか？」

一夏「ありがとう、円夏、箒」

殺那「それにしても、女子達の反応凄かったな」

フィリップ「確かに、あの反応は少し驚いたね。」

円夏「そういえば、みんな放課後どうする？」

一夏「俺は真っ直ぐ帰るかな」

白夜「俺も」

フィリップ「僕もかな」

殺那「俺は少し残るわ」

箒「何故だ？」

殺那「いや、俺のISの調整と学園の設備に慣れようと思っただけ」

白夜「まだスラスタアの出力安定してないのか？」

殺那「いや、そこは良いんだけど光線がね、移行してからどうも、出力超過でいつオー

バーヒートするか…」

円夏「殺那さんも大変だね」

そんな雑談を続けていると、

???「ちよつとよろしくて？」

いきなり声がかかってきた。

白夜、殺那、一夏 「「んあ?」」

箒、円夏 「ん?」

フィリップ 「何かな?」

声をかけて来たのは金髪碧眼のいかにも美少女といった感じの少女だった。

??? 「まあっ! なんですのそのお返事は!?! このわたくしに声を掛けられたのですから、それ相応の対応があるのではなくて?」

箒 「は?」

円夏 「何言ってるのあんた?」

いきなりの態度に怒りを隠せない女子組、一方で男子組は…

白夜 「へへ (これが女尊男卑ってやつか…)」

殺那 「は〜 (気強いな〜)」

一夏 「はあ… (誰?)」

フィリップ 「所謂女王様キャラというやつか、中々興味深い。」

全く動じてなかった。

??? 「まあ、私は優しいですし、分からないことがあればそれ相応の態度と言葉遣いでしたら、答えてあげなくもなくてよ。」



白夜「んじゃーっ良いか？」

???「貴方私の話を聞いてましたの？」

白夜「あんた誰？」

「「「「「ブフオツツ!!」「「「「「

白夜の爆弾発言に少女以外の全員（聞き耳を立てていた者を含め）が噴き出し、対する少女はプルプルと震えている。

セシリア「知らないですって!?!このイギリス代表候補生であり、入試主席のセシリア・オルコットを!？」

白夜「知らん、そもそもイギリスに代表候補がいたい何人いると思ってんだ、ついでに入試の首席なんぞどうでもいい。」

セシリア「あ、あなたねえ…」

キーンコーンカーンコーン

金髪碧眼美少女もとい、セシリアが何か言い返そうとしたが、休み時間の終了を告げるチャイムが鳴った。

セシリア「く…また来ますわ、くれぐれも逃げないことね!」

そう捨て台詞を吐いてセシリアは自分の席へ戻っていった。

円夏「何なのあいつ!？」

箒「見るからに女尊男卑に毒されてるな…」

一夏「なんか休み時間なのにドツと疲れた。」

殺那「ただ、彼女は何か心に闇を抱えてるっぽかったな…」

フィリップ「確かに、さっきの態度もどこか無理してる雰囲気があったね」

白夜「まあ、いつか話してくれんじゃない？ つか授業始まるつてのにどう逃げりやいいんだよ…寝よ」

千冬「寝るな馬鹿者!!」

早速寝ようとした白夜に一喝と出席簿が飛び、授業が始まる。もちろん当たることは無かった。

千冬「今回は授業の前にこのクラスのクラス代表を決める」

千冬の発言に当然教室はざわつく。

「先生、クラス代表って何ですか？」

千冬「クラス代表とは、まあ早い話が学級委員だ、雑用やISでのクラス対抗戦等が主な仕事だ、決まったものは一年間変わらないからそのつもりでな。自薦他薦は問わない、誰かいないか？」

その千冬の言葉に、クラスメイト達が次々と挙手をする。

「はいはい！ 私は織斑君を推薦しまーっすー！」

「私は博麗君！」

「それじゃ私は闇代君！」

「いやいやワーム君も捨てがたい！」

皆物珍しいからか男子達を推薦していく。

千冬「他にはいないか？いないならこの四人で決めるぞ？」

一夏「織斑先生、これって拒否権h「無いに決まってるだろ」ですよね…」

セシリア「納得いきませんわ！」

すると、いきなりさっきの少女、セシリアが机を叩きながら立ち上がった。

セシリア「そのような選出は認められません！」

男組「二(よしいいぞもつとやれ!!)二」

セシリア「第一、神聖なIS学園に男がいるだけでも許しがたいことですのに私に一年間この屈辱を味わえと？そもそも、この極東の島国にいること自体耐え難い苦痛で…」

殺那「おーい、セシリアちゃん、セッシー、金髪縦ロールお嬢様ー」

セシリア「誰が金髪縦ロールですか!？」

段々ヒートアップしているセシリアを見かねた殺那が声をかける

殺那「おお、中々鋭いツツコミどうも。」

セシリア「フンツまあ良いですわ。で、何かご用件でも？」

殺那「あのーもうそろそろやめたほうが良いんじゃない？ 今体感温度が2、3度低い上に何故かこつちに命の危機を感じるんだが……」

周りを見るとそこにはクラスメイトの殆どがセシリアを睨みつけていた。だが、

セシリア「く、よくも私に恥をかかせてくれましたわね……決闘ですわ！」

殺那「なんで？」

セシリア「あら、逃げるんですの？」

殺那「え、いや、そうじゃ……（あ、これもうどう転んでも戦うのね）アアイイゾ（諦めの表情）」

千冬「それでは、織斑兄、博麗、闇代、ワーム、オルコットの五人で一週間後に代表決定戦を行ういいな？」

男子組（殺那以外）「「めんどくせえのに巻き込まれた。」」

白夜「なら一つ良いか？」

千冬「なんだ？」

白夜「代表決定戦、俺、殺那、フィリップの三人は三つ巴でやりたい。理由は俺達の戦闘力はほぼ同じでその方が時間短縮になるからだ。」

千冬「そうか、わかった許可しよう。それでは、授業を始める。」  
そして、授業が再開された。

放課後、白夜達男子組は何故か教室に残っているよう言われた。

円夏「白夜さんこれって……」

白夜「ああ、多分な……」

白夜と残っていた円夏、は何故残るよう言われたのか見当がついているようだった。よく見れば、他の男子達や箒（円夏と同じく残っていた）も何処か見当がついているようだった。

真耶「あ、織斑君、博麗君、闇代君、ワーム君、ちゃんと残ってくれてたんですね。」

一夏「はい、まあ」

白夜「それで、俺達を残らせた理由って何ですか？」

真耶「そのことなんですけど、皆さん一週間は自宅通学の予定だったのですが、事情があるので今日から寮での生活になってもらうことになりました。」

殺那「それってまさか……」

真耶「はい、政府からの指示です。」

フィリップ「はあ……相変わらず面子と仕事してるアピールのためだけにはやることが

早いね。」

一夏「それより俺達、いきなりで荷物とか取りに行きたいのですが」

千冬「それなら安心しろ、私が持ってきてやった。」

一夏「千冬姉、ありがとう！」

千冬「織斑先生だ馬鹿者！」

ついついもの呼び方をしてしまった一夏に千冬は出席簿アタックをするが、

シユツ、パンツ

一夏「す、すみません、お、織斑先生」

すんでのところで白刃取りで防いだ。

千冬「ほう、まさか弟に防がれるとは、まあ良い中身はバッグに入ってたものをその

まま持つてきたがそれでいいな」

一夏「あ、はい、それで構いません」

千冬「それはそうとよく荷物をまとめたな。まさかこのことを予想してたのか？」

一夏「ま、まあ俺というより白夜達が「ジジイ共は予告なしで寮にぶち込むとか馬鹿なこともやりかねない」って言っていたので一応纏めておきました。」

千冬「そうか、それはそれとして、博麗、閻代、ワーム、お前たちの荷物はどうする

？」

白夜「それなら問題ない」

そういつて白夜はストレージから小さめのポストンバッグを取り出した。

千冬「ほう、面白いなR F Cの新商品か？」

白夜「それは企業秘密で」

千冬「そうか、まあ良いこれが寮の鍵だすまんが暫くは他の者と相部屋になる、一応相部屋になる者には事情を説明したから安心しろ。因みに織斑、お前は篠ノ之と相部屋だじゃあな、山田先生あとは任せます」

そう言つて千冬は教室を出ていった。

真耶「了解です。そういうことですので皆さんくれぐれも寄り道しないで帰ってくださいね。」

そうして真耶も教室を出ていった。

暫くして先に口を開いたのは一夏だった。

一夏「と、取り敢えずよろしくな、箒」

箒「そ、そうだな、よ、よろしく頼む。」

白夜「おーおー顔紅くしちやつてーもしかして照れてる？」

箒「ち、違う！」

殺那、フリリップ、円夏「ニ(・▽・)ニヤニヤ」

一夏と箒が顔を紅くしているが、箒はともかく一夏はただ女子と相部屋になることで少し緊張しているだけである。

彼らは暫く雑談した後、一夏、箒、白夜、フリップはそれぞれの部屋に、殺那はI Sの整備室に向かった。

白夜達と別れた殺那は、整備室で思いがけない人物に出会った。

???  
「誰？」

殺那「俺は闇代殺那、君は？」

箒「私は更識箒。殺那ってことは貴方が同室になる人なんだ、話は織斑先生から聞いてるから。」

それは、数か月前に害虫駆除の際に助けた更識箒だった。しかも殺那と同室だった。

殺那「おう、よろしくな（まさか前助けた人と再会だけじゃなく同室になるとは…）。箒ももしかしてI Sの調整？」

箒「ううん、違う。I Sを造ってる。」

殺那「I Sを造る？なんで？」

箒「世界初の男性I S操縦者が出てきて、元々倉持技研が造ってた私のI Sが凍結になった。」



殺那「ちよつと待て、一夏はISを動かしてすぐにRFCに入った。いくら倉持でも

一夏関係で出る幕はないんじゃないか？」

簪「凍結命令は政府が出してたみたい。」

ブチッ!!

簪「ブチ？」

殺那「悪い久々にイラつと来たわ。」

殺那はそう言いながら拳を握り締め、どす黒いオーラを出す。

殺那「なあ、このIS俺にも手伝わせてもらえないか？」

簪「え、ええ!？」

そう言つて簪に向き直る殺那。簪は突然のことで驚く。

簪「なんで？」

殺那「ん？」

簪「なんで？ 貴方にこのことは関係ない、なのになんで？」

殺那「ああ、そんなことか」

簪の疑問に殺那はあつげらかんと答える。

殺那「理由なんてねえよ、ただここで知り合つたのも何かの縁だと思つてな」

簪「フフツ」

その答えに簪は思わず吹き出す。

簪「ありがとう、お願いしていい？」

殺那「ああ、よろしくな」

そう言つて殺那は右手を出す。

簪「あ、うん／＼／＼よろしく殺那」

簪は少し顔を紅くして握手した。

## 08：龍牙

殺那と簪は、二人でI Sの整備と製作をしていた。

殺那「そーいや簪のI Sって一人で造ってるのか？」

簪「うーん、いつもはお姉ちゃんと造ってる。今日は生徒会の仕事で遅くなるみたい」

殺那「なんかの役員なのか？」

簪「うん、生徒会長。よく仕事さぼって怒られてる。」

殺那「ハハ、お姉さんと仲が良いんだな。」

その言葉で簪の顔に少し影が差す。

簪「うん、でも…少し前まであまり仲が良くなかったんだ。」

殺那「へー」

簪「反応軽くない!？」

殺那「いや、なんか話しずらそうだったし。今仲がいいならそれでいいんじゃないか  
と思ってるな。」

簪「そうなんだ…ありがとう…」

二人で作業しながら雑談していると。

キイイイイン キイイイイン

突然部屋中に金切り音が響く。

簪「ヒイツ！」

簪は過去のトラウマからか、ガクガクと震えながら怯えている。

殺那「(簪にはこの音が聞こえる体質なのか…) 大丈夫か?」

簪「イヤ、イヤ」

殺那「簪!」

簪「へ?」

殺那は恐怖で放心状態の簪の肩を抱き寄せて落ち着かせる。

簪「せ、殺那!」

殺那「落ち着いたか?」

そう言いながら、抱き寄せた肩を離す。

簪「あ／／／ありがとう／／／」

簪は顔を真っ赤にしながら礼を言う。

殺那「それより…やばいな、まさか生き残りがいたとはな…」

簪「え?」

殺那「ミラーモンスターは一度狙った獲物を繰り返し襲う習性がある。ついでに言え

ば繁殖した個体は記憶を子に受け継がせる。」

簪 「へ、へえ…」

殺那 「そんなわけで下手すりゃこんなことになる。」

簪 「へ？」

殺那が指差す方向には大きい姿見があり、簪がそれを見ると…

「うううう…」

簪 「キヤアアアア!!!」

大量のシアゴーストが次々と鏡から出てきていた。

思わず簪が悲鳴を上げたその時、

??? 「セーリヤア!!!」

ISを纏った一人の少女が、シアゴーストの一体に槍で斬りかかった。

??? 「簪ちゃん!大丈夫!」

簪 「お、お姉ちゃん!」

その少女は、簪の姉である更識刀奈だった。

刀奈 「簪ちゃん、ここはお姉ちゃんに任せて早く逃げて!」

刀奈はそう言うと、再びシアゴースト達に向かって斬りかかる。

簪 「お姉ちゃん!」

殺那「俺、空気じゃね？」これだと多分持たないな…」

鬼気迫る勢いでシアゴースト達に攻撃をする刀奈、ただその勢いとは裏腹に段々と押され始める。そして、

刀奈「キヤア！」

遂にシアゴーストの一体に槍を弾かれ蹴り飛ばされる。それによつて彼女のＩＳのシールドエネルギーが切れたのか、強制的にＩＳが解除された。

簪「お姉ちゃん！」

刀奈「簪ちゃん！お姉ちゃんは大丈夫だから！早く逃げて！」

簪「そ、そんなの出来ないよ！お姉ちゃんも一緒に逃げよう！」

刀奈「そうしたいんだけど、ツう…！」

刀奈が立とうとして痛そうに唸る、よく見ると左の足から血が流れていた。

簪「お姉ちゃん、足が…」

刀奈「私は大丈夫…だから逃げて…」

簪「そんな、お姉ちゃんを置いてなんて出来ないよ！」

刀奈「良いから逃げなさい！」

簪「そんな…お姉ちゃん危ない！」

刀奈「へ？」

簪が叫び振り返ると、そこにはあの日の様に刀奈に襲い掛かるシアゴースト、殺那「ドラッグブラッカー！」

だが、その攻撃が刀奈にあたることは無かった。

刀奈に攻撃が当たる直前に黒い龍がシアゴーストを通り抜けざまに喰い千切った。

そして、黒い龍ドラッグブラッカーは殺那の周りを旋回している。その殺那の腰にはVバックル、左手には黒い龍の刻印が刻まれたカードデッキを持っていた。

刀奈「この龍って、あの時の……」

簪「ドラッグ、ブラッカー……」

殺那「あの日に約束したろ？お前たちぐらいなら守ってやるってな、刀奈、簪」

刀奈「え？あなた、なんで私の真名を知ってるの？」

刀奈は自分の真名を知っている殺那に驚く。本来、更識家の当主は受け継ぐ際に楯無の名を襲名し、以降はそれを名乗る。当主の真名を知る者は、家族を除き、婚姻の契りを結んだ者のみである。

殺那「君が教えてくれただろ。変身！」

そう言つて、カードデッキをVバックルに嵌める。そして、無数の鏡像が殺那に重なり、黒い龍騎士、仮面ライダーリュウガUDの姿に変わった。

簪「え……」

刀奈「あの時の…」

二人は目を見開いて固まっている。

リュウガUD「刀奈、簪、一応これを持ってろ」

リュウガUDはSEALのアドベントカードを2枚、2人に渡す。

簪「これって…」

刀奈「なにこれ？」

リュウガUD「詳しくは簪に聞いてそんじや」

SWORDVENT

リュウガUD「セリヤツ!!」

リュウガUDはシアゴースト達斬りかかる。

斬られた害虫<sup>シアゴースト</sup>達が次々と爆散し、残ったエネルギーをドラグブラツカーが食ってい

くが、

「づああ…」

リュウガUD「つち、キリがねえ…」

倒したそばから次々と湧いてくるシアゴーストに徐々に苦戦を強いられる。

更に、

「づあ、づあ、づあ、」



シアゴースト達が脱皮して、次々とレイドラグーンに変態していく。

リュウガUD 「ハア…もう脱皮したのかよ…そろそろやばいな…ハア…ハア…」  
リュウガUDの体力もそろそろ限界に近付いていた。

「づあ…」

ザシュ!!

リュウガUD 「グガアツ!!」

簪、刀奈 「殺那(君)!!」

リュウガUDがレイドラグーンの鎌に斬られ、吹き飛ばされる。

リュウガUD 「ハア…ハア…」

レイドラグーンとシアゴーストの群れがリュウガUDに群がろうとする。

その時、

ADVENT

ADVENT

「キュイイイイ!!」

「キュイイイ!!」

何処からともなく巨大な紅い龍と紺の蝙蝠が現れ、レイドラグーン達に襲い掛かった。

簪「ドラグレッツダーと、ダークウイング!?」

刀奈「知ってるの? 簪ちゃん」

倒れているリュウガUDに、2体のモンスターの契約主、龍騎UとナイトBが駆け寄る。

龍騎U「大丈夫か?」

ナイトB「これは、ひどくやられたものだね」

リュウガUD「ああ、流石に多勢に無勢だった」

龍騎U「弱体化してるからな…」

ナイトB「取り敢えずサバイブを使った方が良いね」

龍騎U「そうだな、ほい、」

龍騎Uは、ナイトB、リュウガUDにサバイブの「疾風」「無限」を渡した、

リュウガUD「リュウガのサバイブって烈火じゃなかったか?」

龍騎U「なれりや同じだろ」

リュウガUD「(絶対違う) まあいいや」

龍騎Uはドラグバイザーツバイ、ナイトBはダークバイザーツバイ、リュウガUDはブラックドラグバイザーツバイにそれぞれのサバイブカードをセットした。

SURVIVE

S U R V I V E

S U R V I V E

二重に重なったような音声の流れ、三人はそれぞれ、龍騎サバイブU、ナイトサバイブB、リュウガサバイブUDに変身した。

刀奈「すごい…」

簪「かつこいい…」

龍騎U「めんどくせえから一気に決めるか」

リュウガUD「そうだな、俺もかなりやばい」

ピコンピコンピコン…

リュウガUDにあるカラータイマーが赤く点滅する。

ナイトB「本当に冗談抜きでやばいね、行こう」

3人は1枚のカードを取り出し装填する。

F I N A L V E N T

F I N A L V E N T

F I N A L V E N T

紅い龍「ドラグランザー」黒龍「ブラックドラグランザー」碧い蝙蝠「ダークレイダー」がバイクに変化する。3人が跨り、走り出す。

ダークレイダーから青いを大量に発射し、シアゴーストとレイドラグーンの群れの動きを封じ、ドラグランザーとブラックドラグランザーからそれぞれ赤と黒の火炎弾を発射し、動きを止められたモンスタ<sup>害</sup>スター<sup>虫</sup>達を撃破していく。残った害虫達も、ミサイル状に変形したダークレイダー、ドラグランザーとブラックドラグランザーで轢き殺した。

害虫駆除の終わった3人は変身を解除する。

簪「え？この人達って」

白夜「ん？どうした？」

殺那「そーいやあんたらのこと知らないと思うぞ、教えてないし教える時間もなかったし」

フィリップ「そーなの？」

刀奈「まさか…織斑一夏君以外の男性操縦者全員がその…なんだっけ？」

殺那「仮面ライダー」

刀奈「そー、それ」

フィリップ「あの、更識さんだったっけ？ここじゃなんだから場所を変えないかな？」

刀奈「そーね、それじゃ、生徒会室に行きましょう。そこじゃ盗聴も盗撮も心配ないから」

白夜「そーか、案内頼む」

く生徒会室く

刀奈「改めて、私は生徒会長の更識楯無よ、よろしく。そして、さつきは助けてくれてありがとう。」

簪「更識簪です。私からも、ありがとう」

白夜「お、おお」

生徒会室に案内された白夜達は。刀奈と簪から礼を言われた。

フィリップ「そういえば、殺那は二人と面識があつたみたいだけど、何処で知り合つたんだい？」

殺那「ああ、数か月前にもあの害虫共の駆除やったじゃん、その時にこの二人が襲われて助けた。」

白夜「もしかして無駄にテンション高かった時の奴か？」

殺那「そう、それ」

刀奈「あの時はのことは感謝してもしきれないわ……」

簪「死んだときはほんとに怖かった、もうお姉ちゃんにも会えないと思つた。」

簪の身体がわずかに震え、刀奈がそつと抱き寄せる。

白夜「死んだつてことはお前、彼女を蘇生させたのか？」

白夜が殺那を睨む。

殺那「そのまま放置は目覚め悪すぎるだろ。」

白夜「いや、別にそのことはどうでもいいがせめて報告してくれ。蘇生魔法は種類によつちやどんな副作用があるかわかったもんじやないからな」

殺那「時間操作レバイドからの蘇生インガル」

白夜「なら問題ない」

殺那「そういや、簪、刀奈、2人とももしかしてミラーワールドの探知能力があるんじゃない？」

簪「うん、多分」

刀奈「あの時の金切り音みたいなものなら、私達にも聞こえるわね。」

殺那の質問に2人は頷く。

殺那「そのことなんだがな、多分2人とも今後もしかしたらまた狙われるかもしれない」

刀奈「どういうこと？」

白夜「ミラーワールドつてのは本来、カードデッキを持っている者しか探知できない。だからそれ以外で探知出来る人間がいるとその人間を使って何かしらしようとする奴が必ずいる。人間でも、それ以外でもな」

簪「そんな…」

刀奈「でも、私達の家系は特殊なの。そう簡単に私達が襲われるとは思えないけど…」  
白夜「人間相手なら大丈夫だろうな、だが、それ以外はそうとは限らない」

刀奈「どういうこと？」

殺那「グロンギ、アンノウン、アンデッド、その他怪人や怪獣、異星人に物の怪、外は何処にでもいるが、この世界の人間達はそれに対する力が皆無と云っていい。当たり前だ、数年前までそんなものはこの世界には存在しなかったからな。」

簪「それって、どういうこと？」

フィリップ「そのことについては少し長くなるけど良いかな？」

3人は自分たちが何処から、何のために来たのかを話した。セレブロの暗躍やその影響のことも…

フィリップ「…そのせいでこの世界が色々な世界と繋がって、君たちが物語の中でしか認知していないような者たちがこの世界に現れるようになったんだ。」

刀奈「なんか、すごい大ごとね…」

簪「それより、殺那達って、ウルトラマンだったの!？」

殺那「あ、ああ（すげえ目が輝いてるな…）」

簪（輝いた瞳）

殺那「…（か、かわいい…）」

殺那は簪に少しドキリとした。

白夜「そういうことだから、更識だけで対処するのはちと無理だと思うぞ。」

刀奈「そのことについては了承したわ。で、それを教えてあなた達の目的は何？」

刀奈の目が少し険しくなる。

白夜「は？」

刀奈「とぼけないで、いくら何でも私達にここまで情報を教えるなんて何か裏があると考えるのが普通よ。」

白夜「…ああ、忘れてた」

刀奈（ガタツ）「忘れてたのね…」

白夜の発言で刀奈はズツコケる。

白夜「ああ、まあ目的って言うてもうちと更識で協力関係を築きたいと思ってるな。」

刀奈「協力関係…それってあなた達の企業と？それとも、あなた達の保有する暗部と？」

部屋の空気が静まり返る。その静寂を破るように白夜が答える。

白夜「基本的には暗部とだな、人外相手にするのは大体暗部だからな」

刀奈「そう、その件については了承したわ、正式な契約は後になると思うけど」

白夜「りよ」



刀奈「緊張感皆無ねあなた：まあ良いわ、それより殺那君」  
殺那「はい？」

刀奈「貴方に伝えたいことがあるの」

そう言くと刀奈と簪は殺那の前に立つ。そして、

刀奈、簪「殺那（君）好きです！付き合ってください！」

白夜、フィリップ「ぶっふううううう!!!」

殺那「はい？」

先程とは別の意味で場が静まり返った。

## 09：不束者

殺那「あの…どゆこと？」

刀奈「そのまんまの意味！／＼／＼」

簪「私たち二人と恋人になって／＼／＼」

殺那「は、はあ（どうしよう…）」

殺那はいきなりのことです戸惑う。

簪「それで」

刀奈「返事、くれないかな？」

刀奈と簪が上目遣いで迫り、ますます混乱する。

殺那「とりあえず、告白してくれたのは嬉しい。だけど、俺なんかのどこが良かったとき、  
？」

殺那はなんとか言葉をつまみ出した。

刀奈「あの時、ミラーモンスターに初めて襲われたとき、簪ちゃんが殺されて、目の前が真っ白になった。でも、あなたが簪ちゃんを助けてくれて、『守ってやる』って言われたとき、すごく胸が熱くなって…／＼／＼」

簪「私も同じ／＼／＼最初は憧れの仮面ライダーに助けられたことが嬉しかったからだと思つてた。でも、そのことを思い出すたびに胸が熱くなつて、お姉ちゃんに相談したらお姉ちゃんも同じで、だから二人で話し合つて、またあの仮面ライダーと再会出来たら告白しようつて／＼／＼」

2人はモジモジと恥ずかしがりながら答える。

殺那「それだと最悪どちらかが失恋するだろ…」

簪「だから、私達2人と付き合つて欲しい」

殺那「要するに二股かけろと？」

刀奈「私達は合意の上よ、どちらかと言えばハーレムね♡」

殺那「ハートやめい…二人の気持ちは分かつた、それに、俺も初めて二人に会つた時、

正直一目惚れした、だけど…」

そう言うのと一瞬言葉に詰まる。

殺那「俺は、不老不死の化け物だ、それでも…それでもいいのか？」

こう切り出す、2人は、

刀奈「そんなの関係ないわ」

簪「殺那は殺那、どんな存在でも私達を救つてくれた、私達のヒーロー」

殺那「そつか…それじゃ、不束者だけどよろしく」

刀奈「それじゃ／＼／」

簪「よ、よろしく／＼／」

三人は晴れて恋人同士になった。

一方他の2人は、

白夜、フィリップ「(何見せられたんだ？俺(僕)等…)」

完全に空気だった。

更識と協力関係を結ぶ代わりに(いつの間にか)生徒会に入った白夜達は、(約一名除いて)疲労困憊の様子で、部屋に入った。

→2000号室、白夜の部屋←

白夜「お前が俺のルームメイトか…」

静寐「うん、私は鷹月静寐、宜しくね。」

白夜「ああ、宜しくな。ベッドはどっち使うか希望あるか？」

静寐「うん、窓側で良いかな？」

白夜「りよ」

静寐「あはは、結構ノリ軽いんだね…それはそうと、もう夕飯は食べた？」

白夜「んや、まだだが」

静寐「そうか、じゃあ一緒に食べない？私も今からだから。」

白夜「おお、ええで」

2人は食堂へ向かった。

く2009号室フィリップの部屋く

フィリップ「君が僕のルームメイトな訳か、宜しくね本音ちゃん」

本音「よろしくなのだくふいーふいー」

フィリップ「うん、(ふいーふいー…)そういうえば、本音ちゃんは夕飯はもう食べたかい？まだなら一緒に行かないかい？親睦を深めるためにも。」

本音「それはいいねくいいこくいいこく」

2人は食堂に向かった。

く寮、廊下く

白夜「お、フィリップも食堂か？」

食堂に向かう途中の白夜と静寐は、同じく食堂に向かっていたフィリップと本音に出会った。

フィリップ「白夜もか、隣の子はもしかしてルームメイトかい？」

白夜「おん」

静寐「鷹月静寐だよ、よろしくね。」

フィリップ「よろしく、静寐ちゃん」

本音「ルームメイドの布仏本音なのだ」

白夜「おう、よろしくな」

そうして、四人は一緒に食堂に向かうことにした。

フィリップ「そういえば殺那は？」

白夜「先に更識姉妹と席とつてるらしい。」

本音「へ〜かんちゃんとなつちちゃんさんにも春が来たのか」

白夜「知り合いなのか？」

本音「うちは代々更識家の召使の家なんだよ〜だから〜前々から二人の恋路を応援してたんだ〜因みに私はかんちゃんの専属メイドで〜たつちちゃんさんはお姉ちゃんが専属メイドだよ〜」

白夜「へえ〜」

四人は途中で円夏と彼女のルームメイドだという相川清香も加わり、そこそこの人数になつて食堂に向かう。すると、

一夏「箒待て！それはまずい！」

箒「問答無用！」

一夏「ギャアアアアアア!!!」

遠くから怒号と断末魔が聞こえたが、

白夜「無視するか、」

フリリツプ「そうだね」

円夏「お兄ちゃん…」

無視して、無事に食堂へ着いた。

因みに寮の一角では血の海、食堂では砂糖の海が出来ていたという。